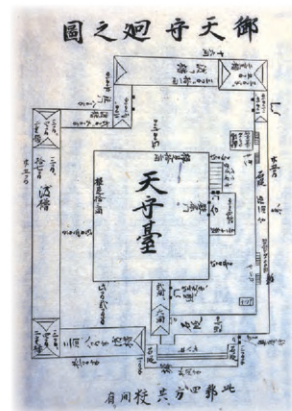


史跡 津山城跡

保存整備事業報告書Ⅱ



2016

津山市教育委員会

史跡 津山城跡

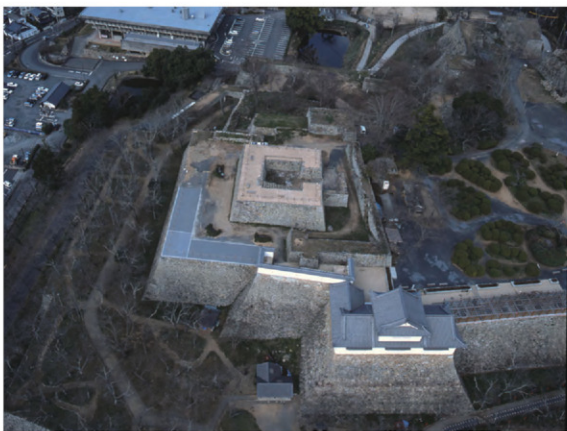
保存整備事業報告書Ⅱ

2016

津山市教育委員会



史跡津山城跡航空写真（平成 27 年撮影）



平成 18 年度整備工事終了後航空写真



平成 19 年度整備工事終了後航空写真 1



平成 19 年度整備工事終了後航空写真 2

序

津山市は岡山県の北部に位置し、人口は約10万4千人、現在の市街地は、慶長8年（1603）に美作18万6,500石を領して入封した森忠政によって整備された城下町を基盤としております。出雲往来沿いにある城下町は、戦災にあっていないこともあり、古い町並みが良く残っております。特に城東地区は重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今後の保存活用が期待されるところであります。

さて、史跡津山城跡は、近世城郭の優れた遺構として、昭和38年9月28日付けで国の史跡指定を受けました。史跡等の保存整備と活用を求める声が高まる中、平成10年3月に、『史跡津山城跡保存整備計画』を策定し、第1期計画として平成10年から29年度の20年間の事業期間に、各種調査、虎口通路整備、石垣の修理、既存樹木の整理、既設占有物の撤去、備中櫓の復元などの事業を実施することを決定しました。

本報告書は、これらの事業のうち、平成18年度及び19年度の発掘調査成果と整備事業を中心にまとめたものです。発掘調査では、これまで確認されていなかった埋没石垣など新たに発見された遺構などもあります。

なお最後になりましたが、事業の実施にあたっては、史跡津山城跡整備委員会委員の先生方、及び文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の皆様方には熱心にご指導、ご助言をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成28年3月31日

津山市教育委員会

教育長 田村芳倫

例 言

- 1 本書は、津山市が国庫補助事業で実施した、史跡津山城跡保存整備事業報告書である。
- 1 対象とする期間は、平成 18 年度及び平成 19 年度で、各年度の発掘調査、及び整備工事について掲載した。発掘調査については、平成 18 年度が第 10 次、平成 19 年度が第 11 次となり、第 1 次～第 9 次については『保存整備事業報告書 1』で報告している。なお、平成 9 年度の第 1 次調査で出土した遺物のうち、一部を本報告書に掲載した。
- 1 整備事業の実施にあたっては、史跡津山城跡整備委員会、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の指導・助言をいただいた。
- 1 発掘調査は、津山市教育委員会文化課平岡正宏（現在は異動により津山市都市建設部歴史まちづくり推進室）が担当した。
- 1 本書の執筆は豊島雪絵、宮崎絢子が行い、編集は豊島が行った。また、出土遺物の整理作業は野上恭子、岩本えり子、家元弘子、漆間千香子、春名博美、宗本節子が行い、文献調査・年表の作成は乾貴子の協力を得た。
- 1 発掘調査に使用した座標は第 V 直角平面座標系で、方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 1 本書に掲載した絵図は、すべて『津山城資料編』に所収されているものである。
- 1 発掘調査による出土遺物、図面類及び工事関係図面類は津山市教育委員会文化課津山弥生の里文化財センターで収蔵・保管している。
- 1 本書のデータは P D F 形式で保管している。

目 次

第1部 津山城と保存整備事業の概要	1
第1章 津山城の概要	3
第1節 位置と歴史的環境	3
第2節 津山城の歴史	7
第2章 史跡和山城跡保存整備事業について	13
第1節 整備計画の策定と整備委員会の設置	13
第2節 保存整備計画の概要とこれまでの整備事業	15
第2部 発掘調査の概要	19
第1章 発掘調査の記録	21
第1節 はじめに	21
第2節 第10次調査（平成18年度）	23
(1) 調査区の概要	24
(2) 出土遺物	27
(3) まとめ	28
写真図版	31
第3節 第11次調査（平成19年度）	41
(1) 調査区の概要	41
(2) 出土遺物	43
(3) まとめ	49
写真図版	51
第4節 第1次調査（平成9年度）出土遺物	61
(1) はじめに	61
(2) 出土遺物	61
(3) まとめ	67
写真図版	69
第3部 整備工事の概要	83
第1章 天守曲輪西半整備工事（平成18年度）	85
第1節 事業の概要	85
(1) 事業に至る経過	85
(2) 事業体制	85
(3) 事業の経過	85
(4) 事業費	86
第2節 工事の概要	87
(1) 工事の種類・規模	87
(2) 工事の過程	87
(3) 工事の概要	87
(4) 工事関係者	91
写真図版	93
第2章 天守曲輪北面多門櫓腰石垣修復工事（平成19年度）	97
第1節 事業の概要	97
(1) 事業に至る経過	97
(2) 事業体制	97

(3) 事業の経過	97
(4) 事業費	98
第2節 工事の概要	99
(1) 工事の種別・規模	99
(2) 工事の過程	99
(3) 工事の概要	99
(4) 工事関係者	100
第3節 整備工事中に見えられた埋没石垣について	106
写真図版	109

挿図・表・写真目次

第1図	津山市位置図	3
第2図	周辺遺跡分布図	4
第3図	津山絵図	8
第4図	津山城の略年表と津山藩森家、松平家略系図	9
第5図	御城御座歌向惣絵図 文化五年(1808)(上)、津山城之図(下)	11
第6図	発掘調査区配置図	22
第7図	第10次・第11次発掘調査区配置図	23
第8図	第10次調査 調査区1 平面図	24
第9図	第10次調査 調査区2 平面図	26
第10図	第10次調査出土遺物1	28
第11図	第10次調査出土遺物2	29
第12図	第11次調査 調査区1 平面図	42
第13図	第11次調査出土遺物1	45
第14図	第11次調査出土遺物2	46
第15図	第11次調査出土遺物3	47
第16図	第11次調査出土遺物4	48
第17図	第1次調査出土遺物1	62
第18図	第1次調査出土遺物2	63
第19図	第1次調査出土遺物3	65
第20図	第1次調査出土遺物4	66
第21図	第1次調査出土遺物5	68
第22図	整備工事範囲図	86
第23図	御天守廻之図(左)、津山絵図(天守曲輪部分)(右)	87
第24図	平成18年度整備工事図面1	88
第25図	平成18年度整備工事図面2	89
第26図	平成18年度整備工事図面3	90
第27図	平成19年度整備工事図面1	101
第28図	平成19年度整備工事図面2	102
第29図	平成19年度整備工事図面3	103
第30図	平成19年度整備工事図面4	104
第31図	平成19年度整備工事図面5	105
第32図	埋没石垣と雨落溝の推定ライン	107
第33図	埋没石垣及び雨落溝が検出された調査区配置図及び調査区平面図	108
第1表	歴代藩主一覧	10
写真1	調査区2 七番門南石垣及び多門櫓腰石垣調査区(南から)	43
写真2	調査区2 七番門南石垣西面(東から)	43
写真3	多門櫓腰石垣南の排水溝(東から)	44
写真4	天守台北側通路部分埋没石垣(西から)	44
写真5	第6次調査(平成14年度)で検出された埋没石垣と雨落溝(西から)	91
写真6	多門櫓腰石垣から検出された埋没石垣(上が北)	106
写真7	埋没石垣(北東から)	106
写真8	埋没石垣(西から)	106

写真図版目次

表紙	御天守廻之図（『作州津山御城内之記』）	2	調査区1調査前（南から）
		3	調査区2・3調査前（南から）
巻頭図版1上	史跡津山城跡航空写真（平成27年撮影）	図版 2-1	調査区全景（南から）
		2	調査区1全景（南から）
		3	調査区2全景（南から）
下	平成18年度整備工事終了後航空写真	図版 3-1	調査区3全景（南から）
		2	調査区1西半部（東から）
		3	調査区1東半部（東から）
巻頭図版2上	平成19年度整備工事終了後航空写真1	図版 4-1	調査区2七番門南石垣（南から）
		2	調査区2排水溝（南西から）
下	平成19年度整備工事終了後航空写真2	図版 5-1	調査区2排水溝（西から）
		2	調査区2排水溝（東から）
		3	調査区2七番門南石垣西面検出状況（北西から）
(第10次調査)		図版 6-1	調査区2多門櫓腰石垣栗石検出状況（東から）
図版 1-1	調査区1調査前（西から）	2	調査区3天守曲輪通路部分埋没石垣検出状況（北から）
	2 調査区1調査前（南西から）	3	調査区3埋没石垣全景（西から）
	3 調査区1調査前（南東から）	図版 7-1	調査区3埋没石垣全景（北西から）
図版 2-1	調査区1石敷遺構（南から）	2	調査区3埋没石垣全景（南西から）
	2 調査区1石敷遺構（西から）	3	中学生職場体験
	3 調査区1石垣及び石敷遺構（東から）	図版 8	第11次調査出土遺物1
図版 3-1	調査区1北側天端石と石敷（西から）	図版 9	第11次調査出土遺物2
	2 調査区1栗石検出状況（北東から）	図版 10	第11次調査出土遺物3
	3 調査区1石敷遺構（南東から）		
図版 4-1	調査区1石敷の石拡大（西から）	(第1次調査出土遺物)	
	2 調査区1天端石の列り込み拡大（西から）	図版 1	第1次調査出土遺物1
	3 調査区2調査前（南東から）	図版 2	第1次調査出土遺物2
図版 5-1	調査区2調査前（西から）	図版 3	第1次調査出土遺物3
	2 調査区2全景（東から）	図版 4	第1次調査出土遺物4
	3 調査区2全景（北から）	図版 5	第1次調査出土遺物5
図版 6-1	調査区2全景（西から）	図版 6	第1次調査出土遺物6
	2 調査区2全景（南西から）	図版 7	第1次調査出土遺物7
	3 土壌1（西から）	図版 8	第1次調査出土遺物8
図版 7-1	土壌2（北西から）	図版 9	第1次調査出土遺物9
	2 土壌3（北から）	図版 10	第1次調査出土遺物10
	3 溝1石列（北から）	図版 11	第1次調査出土遺物11
図版 8	第10次調査出土遺物1	図版 12	第1次調査出土遺物12
図版 9	第10次調査出土遺物2	図版 13	第1次調査出土遺物13
図版 10	第10次調査出土遺物3	図版 14	第1次調査出土遺物14
(第11次調査)			
図版 1-1	調査区全景（南から）		

(平成18年度工事)

- 図 版 1 平成18年度整備工事1
- 図 版 2 平成18年度整備工事2
- 図 版 3 平成18年度整備工事後航空写真

(平成19年度整備工事)

- 図 版 1 平成19年度整備工事1
- 図 版 2 平成19年度整備工事2
- 図 版 3 平成19年度整備工事3
- 図 版 4 平成19年度整備工事4
- 図 版 5 平成19年度整備工事5
- 図 版 6 平成19年度整備工事6
- 図 版 7 平成19年度整備工事7
- 図 版 8 埋設石垣航空写真1
- 図 版 8 埋設石垣航空写真2

第 1 部

津山城と保存整備事業の概要

第1章 津山城の概要

第1節 位置と歴史的環境

(1) 津山市の位置

津山市は岡山県北部に位置し、人口約10万4千人、面積506.36㎓を測る地方都市である。市域の東は勝田郡勝央町及び奈義町、西は苫田郡鏡野町及び真庭市、南は久米郡美咲町、北は鳥取県八頭郡智頭町及び鳥取市にそれぞれ接する。平成17年(2005)に周辺の4町村との合併により現在の市域となった。

市の北部地域は、鳥取県との県境をなす標高1,000m級の中国山地南面の傾斜地にあたり、南部は中部吉備高原に接している。市の中心部である南部は標高100～200mの津山盆地にあたる。

市の中心部には、鳥取県境に位置する鏡野町上齋原に源流をもつ吉井川が西から東へ流れ、市街地東部で加茂川が合流し、瀬戸内海に注ぐ。吉井川の周囲に広がる沖積地と河岸段丘が近世城下町の中心であり、現在の市街地となっている。市街地には国道53号線とJ R津山線がほぼ平行して東西に走る。岡山、鳥取へはそれぞれ約1時間30分程度で移動可能である。

津山城は、吉井川と市街地を南北に流れる宮川の合流点の北西部に位置する。

(2) 歴史的環境

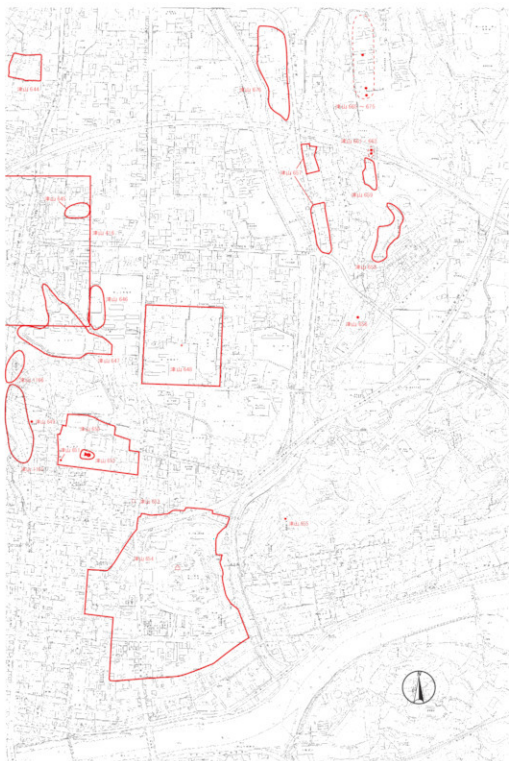
津山市域での人類の痕跡は旧石器時代からみられるが、遺物のみの出土で実態は明らかでない。周辺では大田茶屋遺跡で旧石器時代末頃とみられる石器が出土している⁽²¹⁾。また、市街地東部に位置する天神原遺跡でナイフ形石器が出土している⁽²²⁾。

縄文時代になると、断片的ではあるが生活の痕跡がみられるようになる。市街地北部にある大田西奥田遺跡では早期の竪穴住居が発見されており、近隣の大田茶屋遺跡でも晩期の遺構の存在が確認されている⁽²³⁾。津山城の周辺では、北部、山北地区に位置する小田中遺跡・山北遺跡で縄文土器が出土している⁽²⁴⁾。弥生時代になると、発掘調査により多くの遺跡が確認されることから、平野部及び丘陵上に多くの集落が営まれるようになることがわかる。

津山城の周辺では、宮川流域の京免遺跡、山北一丁田遺跡、高橋谷遺跡があげられる。前期についてはこれらの遺跡で遺物が確認されているが遺構の存在は明らかではない。中期以降は京免遺跡や高橋谷遺跡で集落の存在が明らかになっており、中期から後期にかけて継続的に集落が営まれていたことがわかる。中でも京免遺跡は環濠の存在も確認されており、大規模な拠点集落であったことがわかる⁽²⁵⁾。後期になると遺跡数は急増し、京免遺跡の南側に位置する竹ノ下遺跡では、中期後葉の木棺墓群がみつ



第1図 津山市位置図



654 津山城跡 416 美作国府跡 644 小田中廣畑遺跡 645 樋ノ口遺跡 646 山北一丁田遺跡 647 高橋谷遺跡
 648 旧津山藩別邸庭園(衆楽園) 649 地藏院古墳 650 十六夜山遺跡 651 津山高校内古墳 652 十六夜山古墳
 653 橋高下遺跡 655 丹後山古墳 656 すくも塚古墳 657 竹ノ下遺跡 658 沼野田遺跡 659 沼北高下遺跡 661・
 662 沼澤神社裏1・2号墳 665～675 沼1～11号墳 676 京免遺跡 1165 小田中遺跡 1166 山北遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1 : 15,000)

かっている^(註6)。京免遺跡、竹ノ下遺跡の東側にある丘陵上にも、中期の沼遺跡^(註7)、沼E遺跡^(註8)をはじめとする集落遺跡がみられる。また、平野の西側では、津山城の北西に位置する十六夜山遺跡で弥生時代後期の竪穴住居や建物の柱穴などが確認されているほか^(註9・10)、美作国府跡からも中期から後期かけての遺構・遺物が発見されている^(註11)。

古墳時代になると津山市域においても前方後円墳をはじめ多くの古墳が築かれる。十六夜山古墳は墳長約60mの前方後円墳で、二重周濠を有し、類例の少ない石見形埴輪を伴う^(註12)。築造年代は5世紀末頃で、この地域に突如として現れる首長墳に位置づけられる。このほか、沼遺跡の南側丘陵上に位置する古墳群(沼斎神社裏1・2号墳、沼1～11号墳)は、詳細不明なものもあるが箱式石棺を主体とする古墳群で一部横穴式石室を有するものもある。古墳時代後期後葉に美作地域で多くみられる陶棺は沼8号墳のほか、丹後山古墳・津山高校内古墳などでみられる^(註13)。

美作国は和銅6年(713)に備前国から分国し、国府が津山市総社に置かれた。美作国府跡はこれまで中国自動車道建設に伴う発掘調査をはじめ多くの調査がなされており、奈良時代の国府関連の遺構に加え、国府以前の苦田部衛の遺構と推測されるものも確認されている^(註14・15)。これらの発掘調査例からは、美作国成立以降、この地域は美作国の中心域であったことがわかるが、中世には美作の守護所が院庄に置かれ、この地域における遺跡は減少する。

南北朝時代には山名氏と赤松氏の攻防が繰り返られる中、美作国にも多くの山城が築かれた。山名氏は後に津山城が築かれる鶴山に城砦を築いた。平野部の西側、神楽尾城もその一つで、戦国時代も浦上、尼子、毛利、宇喜多等の諸勢力が相次いで美作国に進攻し、これらの攻防が繰り返された。

天正13年(1585)に宇喜多氏によって美作国は平定されるが、その宇喜多氏も関ヶ原の合戦に敗北し、所領没収となる。その後入国した小早川氏は改易となり、その跡を受けて慶長8年(1603)、森森政が美作国18万6千5百石を領して入国した。

森森政は、築城の適地を探し、津山盆地のほぼ中心に位置し、宮川と吉井川の合流点を見下ろす鶴山を選択した。また、築城と平行して城下の町づくりも始められた。城下町は西の小田中丘陵から東の丹後山南麓の吉井川北岸一帯に形成された。寛文年間(1661～1673)には東は東新町、西は安岡町まで広がり、武家屋敷や、商人・職人の町家、寺社などが置かれた。この町割りには基本的に現在も変わっていない。

註

(註1) 岡本寛久ほか1998『大田茶屋遺跡2 大田障子遺跡 大田松山久保遺跡 大田大正間遺跡 大田西奥田遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129)岡山県教育委員会

(註2) 河本清ほか1975『狼谷遺跡 小中遺跡 天神原遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7)岡山県教育委員会

(註3) 前掲(註1)

(註4) 小林利晴ほか2011『美作国府跡・小田中遺跡・山北遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告228)岡山県教育委員会

(註5) 中山俊紀1982『京免・竹ノ下遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集)津山市教育委員会

(註6) 前掲(註5)

- (註7) 近藤義郎・渋谷泰彦編 1957『津山弥生住居址群の研究』(津山郷土館考古学研究报告第2冊) 津山市・津山郷土館
- (註8) 河本清・柳瀬昭彦・中山俊紀 2001『沼E遺跡1』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第71集) 津山市教育委員会・津山市沼E遺跡発掘調査委員会
- (註9) 尾上元規ほか 1998『十六夜山古墳・十六夜山遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130) 岡山県教育委員会
- (註10) 行田裕美 1999『津山高校創立百周年記念館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』『年報津山弥生の里第6号』津山弥生の里文化財センター
- (註11) 前掲(註4)
- (註12) 前掲(註9)
- (註13) 豊島雪絵 2013『平成25年度特別展図録 土の棺に眠る～美作の陶棺～』津山郷土博物館
- (註14) 高橋護ほか 1973『美作国府 二宮大成遺跡 西原遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6) 岡山県教育委員会
- (註15) 前掲(註4)

第2節 津山城の歴史

(1) 築城

慶長8年(1603)に美作に入った森忠政は、院庄に入る。院庄は鎌倉時代から守護所があったとされる土地であった。しかし、この場所は水害の恐れもあるなど、築城の地には不適であった。

築城の候補地として、津山市日上の天王山と鶴山が上げられ、宮川と吉井川の合流地点を見下ろす鶴山を選び、築城を開始する。

元々この地は嘉吉年間(1441～44)に山名忠政が城を構えており、森氏の入封当時は山上に鶴山八幡宮とそれに付随していた千代稲荷、南の山腹に日蓮宗妙法院が、西の山腹には八子町の集落があった。忠政はこれらを移転させ、慶長9年(1604)に鶴山を「津山」と改め、築城に着手した。手斧始めとして、津山城下の総鎮守となる徳守神社社殿を建立している。

『森家先代実録』によると忠政の第9子御兼が慶長11年(1606)に津山で生まれたと記されていることから、この頃には本丸御殿の建築が進んでいたことがわかる。また、慶長13年(1608)には城の堀と6箇所の門の記述がみられることから、これらが既に完成していたことがわかる。

城の石垣の石材については、吉井川を挟んで南側の石山と呼ばれる一帯と、その下流の金屋から切り出されたとされる。築城工事は、まず御殿などの中心部分の建物ができあがった後、様々な石垣や櫓の工事が進められていったと考えられる。

築城に着手したのは慶長9年(1604)で、津山城が一応の完成をみたのは元和2年(1616)のことであるが、この13年の間に忠政は江戸城、駿府城、丹波篠山城、丹波亀山城、尾張名古屋城などの天下普請、及び大阪冬の陣、大阪夏の陣など各地へ出役や出陣を繰り返している。津山城の石垣からは、野面積みに近いものから、表面を鑿加工し、間詰石をほとんど用いない積み方をするものへと、石垣を積む技術が進歩していることが分かる。森忠政は、各地への普請の中で、築城の技術を進歩させていったのではないかと推測される。

(2) 森家の改易と、松平氏の入封

森氏はその後、長継、長武、長成、と4代95年間存続したが、その後嗣子がなく、元禄10年(1697)8月、領地没収となった。津山城はその後一時幕府の預かりとなり、津山城の在番として広島浅野家が城に入った。翌元禄11年(1698)正月、越前松平家の分家である松平宣富が津山藩松平家初代藩主として10万石で入封した。以降、石高の増減はあるが松平氏は浅五郎、長照、長孝、康哉、康又、斉孝、斉民、慶倫と9代続き、明治2年(1869)、版籍を奉還した。

(3) 津山城の城郭構成

津山城は、吉井川と宮川の合流点を望む小高い山を利用して築かれている。山頂を削平して本丸とし、本丸を囲むように二の丸、三の丸が高い石垣によって階段状に配され、南側を大手、北側を搦手としている。三の丸下段の南、西、北側は総曲輪を形成し、その周囲を土塁と堀で固めている。一方東側は急な断崖であり、その直下に南北に流れる宮川を自然の防壁として利用している。

堀の外側には宮川門、京橋門、二階町門、田町門、作事門、北門が設けられ、城下町の中心となる京



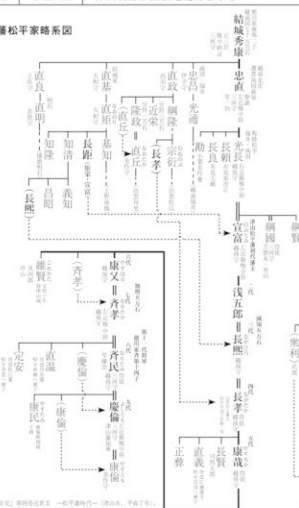
第3図 津山絵図

橋門を大手口とした。堀の幅は、京橋門付近で27 m、水深2.4 mであったことが絵図からわかる。本丸への通路は、大手、搦手とも鍵の手状に曲がる「櫛形虎口」が繰り返して形成されており、極めて防御性を意識した構成となっている。城内の櫓の数は60棟を数え、城内には建造物がひしめき合うように建ちならぶ堅固な城郭構成であったことがわかる。

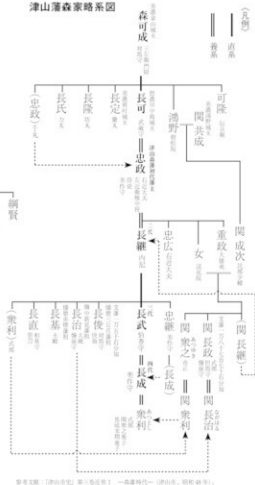
津山城略年表

西暦	年号	出来事
1441	嘉吉 元	美作守護山名教済の一族である山名忠政が「鶴山城」を築き、美作中心部の拠点とする
1469頃	文明年間	山名氏の勢力が衰え、鶴山城は衰退する
1603	慶長 8	森忠政が美作十八万六千五百石を領して入国する
1604	同 9	忠政が「鶴山」を「津山」と改め、築城と城下町の形成に着手する
1615	元和 元	幕府が「一国一城令」を定める
1616	同 2	3月 津山城築城を終了
1655頃	明暦年間	二代藩主長継が城の後園として、城北に「御対面所」（現在の「樂楽園」）を営む
1697	元禄 10	6月 四代藩主長成の死去により後嗣が途絶える
		8月 除封が命じられる（10月に津山城と領国が幕府に引き渡される）
1698	同 11	松平長第（宣富）が津山城及び美作国内の十万石を拝領する
1726	享保 11	二代藩主茂五郎の死去により後嗣が無くなり、五万石を収められる
1809	文化 6	津山城本丸御殿を大火で焼失する（翌7年再建）
1817	同 14	9月 将軍家斉の第十四子銀之介（斉民・確堂）が養子入りする
		10月 七代藩主齊孝に五万石加増が申し渡され、藩領が十万石に復帰する
1869	明治 2	版籍奉還により、藩主慶倫は津山藩知事に任命される
1871	同 4	廃藩置県により松平氏による藩政が終わり、「津山銀行」が城跡内の内山下に置かれる
1873	同 6	津山城の廃城が決定し、大蔵省により城郭が公売に付される
1874	同 7	夏 城郭内の諸建物の撤去が始まる（同8年に終了）
1900	同 33	城跡を津山の町有地とし、「鶴山公園」を開園する
1905	同 38	旧津山松平藩の「修道館」を三の丸に移築し、「鶴山館」を開設する
1963	昭和 38	津山城跡が国指定史跡となる

津山藩松平家略系図



津山藩森家略系図



参考文献 「津山藩史」 朝日新聞社 一般 平成時代「津山藩」平成3年
 「津山藩史」 朝日新聞社 一般 平成時代「津山藩」平成3年
 「津山藩史」 朝日新聞社 一般 平成時代「津山藩」平成3年

参考文献 「津山藩史」 朝日新聞社 一般 平成時代「津山藩」平成3年
 「津山藩史」 朝日新聞社 一般 平成時代「津山藩」平成3年
 「津山藩史」 朝日新聞社 一般 平成時代「津山藩」平成3年

第4図 津山城の略年表と津山藩森家、松平家略系図

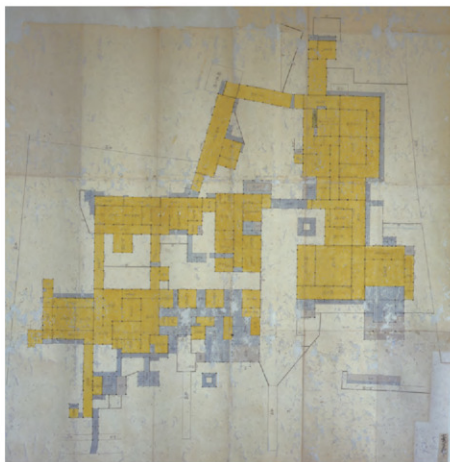
藩主(諱号)	襲封・継社	生没年	父母	婚姻年・正室	生没地	墓地	備考
1 津山森藩初代 森 忠政(本源院)	慶長8年～寛永11年 (1603) (1634) 諡封34歳・在封21年	元禄元年～寛永11年 (1570) (1634) 享年64歳	森 可成 林通安女 (妙向院)	①天正16年 (1588) 中川長兵衛清美 ②文禄3年 (1594) 大和太姫長壽長女	美濃金山 京都妙智寺	京都大徳寺三 玉院	美作国18万 6,500石拜領
2 同 2代 森 長継(長継院)	寛永11年～寛永2年 (1634) (1674) 諡封25歳・在封40年	寛長5年～元禄11年 (1610) (1696) 享年86歳	繁 成次 於熊	寛永12年 (1635) 池田長幸女	津山 江戸芝屋敷	江戸堀尾氏	
3 同 3代 森 長武(円明院)	寛永2年～貞享3年 (1674) (1686) 諡封30歳・在封12年	正保2年～元禄9年 (1645) (1696) 享年51歳	森 長継 池田長幸女	寛永4年 (1627) 岩崎高直女 【異説】菅原高直妹	江戸 目黒関口屋敷	江戸貫水寺	
4 同 4代 森 長成(雄宰院)	貞享3年～元禄10年 (1686) (1697) 諡封16歳・在封11年	寛文11年～元禄10年 (1671) (1697) 享年27歳	長継子忠継 小笠原長次女	元禄2年 (1695) 毛利綱元女	江戸 江戸芝屋敷	江戸神楽寺	
5 津山松平藩初代 松平宣富(謙泉院)	元禄11年～享保6年 (1698) (1721) 諡封19歳・在封23年	寛永6年～享保6年 (1680) (1721) 享年42歳	松平宣尚 村上氏女	元禄16年 (1702) 佐竹右京大夫美濃女	江戸 津山	津山泰安寺	10万石拜領
6 同 2代 松平浅五郎(智円院)	享保6年～同 11年 (1721) (1726) 諡封6歳・在封5年	享保元年～同 11年 (1716) (1726) 享年11歳	松平宣富 光円院	一	江戸稲田屋敷	江戸天徳寺	
7 同 3代 松平長照(戒善院)	享保11年～同 20年 (1726) (1735) 諡封7歳・在封9年	享保5年～同 20年 (1720) (1735) 享年16歳	松平知清 本多氏女	一	江戸 江戸	江戸天徳寺	5万石減封
8 同 4代 松平長孝(隆照院)	享保20年～宝暦12年 (1735) (1762) 諡封11歳・在封27年	享保10年～宝暦12年 (1725) (1762) 享年37歳	松平近朝 結島氏女	宝暦元年 (1751) 藤家高治女	出雲出雲 江戸	江戸天徳寺	
9 同 6代 松平康胤(顯徳院)	宝暦12年～寛政6年 (1762) (1794) 諡封11歳・在封32年	宝暦2年～寛政6年 (1752) (1794) 享年42歳	松平長孝 梅氏院	享保元年 (1717) 井伊掃部頭昌幸女	江戸御台橋部 江戸御台橋部	江戸天徳寺	
10 同 6代 松平康义(嚴恭院)	寛政6年～文化2年 (1794) (1805) 諡封9歳・在封11年	天明6年～文化2年 (1786) (1805) 享年20歳	松平康胤 家田氏女	享和3年 (1803) 藤家高直女	江戸御台橋部 江戸	江戸天徳寺	
11 同 7代 松平斉孝(成裕院)	文化2年～天保2年 (1805) (1831) 諡封18歳・在封26年	文化2年～天保9年 (1788) (1838) 享年51歳	松平康胤 酒田氏女	文化4年 (1807) 松平治好女	江戸御台橋部 津山西御殿	津山泰安寺	10万石に増補
12 同 8代 松平斉院(文定院)	天保2年～安政2年 (1831) (1855) 諡封18歳・在封24年	文化11年～明治24年 (1814) (1891) 享年77歳	徳川家斉 土屋氏女	維新前不明 松平斉孝女	江戸 東京	東京谷中墓地	
13 同 9代 松平慶徳(慎由院)	安政2年～明治2年 (1855) (1869) 諡封29歳・在封14年	文政10年～明治4年 (1827) (1871) 享年44歳	松平斉孝 中西氏女	嘉永4年 (1851) 藤田丹南善女 美平昌高女	津山城 津山	津山崇山閣	

(出典)『森家先代実録』(『岡山県史 津山藩文書』)・『松平御家譜』(『津山藩知会誌』第33編)

第1表 歴代藩主一覧

本丸は西端を石垣で区切って天守曲輪とし、その中央に天守が築かれた。天守は地下一階、地上五階で、最上階の屋根以外に破風をもたない層塔型と呼ばれる構造である。天守の高さは、天守台石垣を除くと約22m、石垣を入れると27mという壮大なものであった。

本丸御殿は、儀式や政務を行う表向きの御殿と、藩主の生活の場にあたる奥向きの御殿に分けられる。表向きの御殿は、「玄関」、「大広間」、「大書院」、「小書院」で構成され、奥向きの御殿には、「料理の間」、「台所」、「居間」、「主殿」などが配される。表鉄門の二階部分を御殿の一部に取り込むなど、御殿の面積を



第5図 御城御座敷向惣繪圖 文化五年（上）、津山城之図（下）

広く使おうとする意図が見て取れる。

森忠政が築いた津山城は、松平時代に度々石垣の積み直しや修復作業が行われているが、実際の戦闘を経ることなく明治を迎えているため、基本的に明治初期の時点では城郭建築のほとんどが築城当時に近い形で残っている。松平家の時代に描かれた絵図が残されているため、往時の城郭構成を伺い知ることができるのである。

文化6年(1809)、藩主松平齊孝の時、本丸御殿の台所から出火し、本丸御殿のすべての建物、及び表鉄門、裏鉄門などが全焼した。本丸御殿は翌7年に再建されるが、表鉄門はその7年後の文化14年(1817)に再建されることとなり、裏鉄門は廃城まで再建されることはなかった。

再建後の本丸御殿を描いた絵図によると、表向きの部分は小書院が造られておらず、表鉄門二階部分を通して広間の玄関に至る構造も廃止されている。

(4) 廃城後

津山城は江戸時代の終焉とともにその役目を終え、明治7年(1874)から翌8年にかけて石垣を残しすべての建物が取り壊された。解体された材木の多くは筏に組まれて吉井川を下り、瀬戸内の製塩の燃料に利用されたという。その後の津山城は桑や麻の畑となるが、大半は荒れ果てた状態であった。明治15年(1882)に設置され、現在本丸天守曲輪の東側にある鶴山城址碑には、それらの状況が記されている。

津山城の保存のきっかけになったのは明治23年(1890)の腰巻櫓石垣の崩落である。当時津山町議会は、町が崩落した石の払い下げを受け、河岸の堤防に利用することを検討していた。そのような状況の中、岡山県の書記官が崩落の現状視察に訪れ、津山町から廃城後の経過や今後の対応を聞き、津山にとって非常に惜しむべきことであると語った。このことが地元有志を動かし、保存に向けた働きかけを町長から郡長、県知事へと次々に行い、明治24年(1891)、鶴山城保存会の発足につながる。このとき津山城は国有地、県有地、私有地が混在していたが、明治32年(1899)から33年にかけて町が必要な土地の取得を終え、明治33年春、「鶴山公園」が開園した。明治37年には、旧藩校の建物の一つを三の丸に移築し、現在の鶴山館となっている。その後大正15年(1926)には、当時の皇太子裕仁親王(のちの昭和天皇)が来津し、津山城跡を訪れ、この鶴山館を視察された。

昭和11年(1936)には津山城跡を中心に産業振興大博覧会が開催され、博覧会の呼び物として天守台の上に本来の天守の3分の2の大きさの天守が建てられた。この天守は「張りぼて」の愛称で親しまれたが、空襲の標的になるという理由から、昭和20年8月に取り壊された。

昭和30年(1955)には三の丸南側に津山市立動物園が開設され、昭和36年(1961)4月からはこれまで無料であった入園が有料となった。明治末から昭和初期にかけて継続的に行われていた桜の植樹もあり、津山城跡は桜の名所としても親しまれるようになった。

参考文献

平岡正宏ほか2007『史跡津山城跡 保存整備事業報告書1』津山市教育委員会

平岡正宏編2009『津山城百問録』津山市

津山市教育委員会2000『津山城 資料編』津山市教育委員会

第2章 史跡津山城跡保存整備事業について

第1節 整備計画の策定と整備委員会の設置

(1) 『史跡津山城跡保存整備計画』の策定まで

史跡津山城跡は、近世城郭の優れた遺構として昭和38年9月28日、国の史跡に指定された。史跡指定範囲は、本丸、二の丸、三の丸を中心とする91,110㎡で、ほぼ全域が公園として鶴山公園として一般に有料公開されている。

史跡指定を受けたことから、石垣で囲まれた部分については現在まで保存がはかられてきたが、周辺地域については、市街地化が進み、本来の城郭の範囲である外堀部分については、京橋門跡の西側に遺存する土塁や、部分堀の名残をとどめる水路などがあるものの、大半はビルや宅地、駐車場となっている。このため、周辺地域については本来の縄張り構成が分かりにくくなっていった。

そこで、津山城跡を都市基盤整備の中で正しく位置づけ、有効活用していくことを目的として昭和63年(1988)に『史跡津山城跡保存整備基本計画』が策定された。

その後、この計画に沿って町並み調査や石垣修復、本丸の民家撤去、トイレ水洗化、無電柱化などの授業が進められてきたが、史跡指定地内の調査や整備をより具体的に推進するための指針が求められるようになり、改めて整備委員会を設置し、『史跡津山城跡保存整備計画』を策定することとなった。

(2) 史跡津山城跡整備委員会の設置

「史跡津山城跡整備委員会設置要項」は平成8年2月16日告示第68号で制定された。委員会の構成は次の通りである。

【平成27年4月現在】

氏名	所属等	初就年月
狩野 久	奈良文化財研究所名誉研究員	平成8年2月～
河本 清	くらしき作陽大学教授	平成8年2月～
鈴木 充	広島大学名誉教授	平成8年2月～
三好 基之	津山市文化財保護委員会委員長	平成8年2月～
可児 通宏	くらしき作陽大学非常勤講師	平成21年4月～
田中 哲雄	日本城郭研究センター名誉館長	平成22年4月～

【平成18年度】

	氏名	所属等(委嘱時)
委員長	牛川 喜幸	長岡造形大学教授
委員	尼崎 博正	京都造形芸術大学副学長
	伊原 恵司	東京芸術大学客員教授
	狩野 久	岡山大学教授
	加原 耕作	岡山県立博物館総括学芸員
	河本 清	岡山県古代吉備文化財センター所長
	鈴木 充	広島大学教授
三好 基之	ノートルダム清心女子大学教授	

【平成19年度】

	氏名	所属等（委嘱時）
委員長	狩野 久	岡山大学教授
委員	尼崎 博正	京都造形芸術大学副学長
	伊原 恵司	東京芸術大学客員教授
	加原 耕作	岡山県立博物館総括学芸員
	河本 清	岡山県古代古備文化財センター所長
	鈴木 充	広島大学教授
	三好 基之	ノートルダム清心女子大学教授

【指導】

本中 眞	文化庁記念物課主任文化財調査官	平成9年4月～平成27年3月
青木 達司	文化庁記念物課文化財調査官	平成27年4月～
田村 啓介	岡山県教育庁文化課課長補佐	平成11年4月～平成22年3月
尾上 元規	岡山県教育庁文化財課主任	平成22年4月～平成25年3月
石田 為成	岡山県教育庁文化財課主任	平成25年4月～平成26年3月
大橋 雅也	岡山県教育庁文化財課総括副参事	平成26年4月～

第2節 保存整備計画の概要とこれまでの整備事業

(1) 保存整備計画の概要

津山市の中心に位置する津山城は、都市基盤の整備とともに急速な市街地化が進み、津山城の城郭としての縄張構成が分かりにくくなっていった。また、国史跡指定地内においても、樹木や後世の占有物によって視界が妨げられている箇所も多くみられ、全体の構成が理解しにくい状況であった。

『史跡津山城跡保存整備計画』は、これらの改善を目的として平成10年3月に策定された。整備期間は、第1期整備計画として平成10年度から平成29年度までの20年間を対象とした。主な事業内容は次のとおりである。

A. 虎口通路整備

冠木門から本丸に到る通路及び本丸から裏下門に到る通路について、往時の通路の景観を復元するために、樹木の整理、石段の修復、土砂の除去、既設物の撤去等を行う。

B. 石垣修理

石垣については現在の時点で崩落の危険がある箇所が本丸五番門など計7箇所認められる。これらの箇所については、基本的に解体・積み直しを行うこととする。

C. 既存樹木整備

津山城内の既存樹木は桜の名所あるいは都市公園の緑地として長年親しまれていることから、可能な限り保全していくこととし、南は桜、北は紅葉を主体とした現状を残していくが、①城の景観を損ねているもの、②石垣を破損したり破損する危険のあるもの、③整備に支障を来すもの の3点について樹木の整理を行う。

D. 既設占有物の撤去

廃城後に設置された既存占有物については基本的に撤去する。

E. 建造物の復元

建造物の復元については、本丸においては備中櫓を対象とする。

F. 展示説明計画

津山城を一般の人々にわかりやすく理解してもらうために、展示施設の充実をはかる。そのため案内施設・表示の充実・ガイダンス施設の設置、本丸御殿の遺構表示などを行う。

(2) これまでの整備事業

史跡津山城跡保存整備計画は平成10年3月に策定されたが、計画策定、委員会設置等の事業がこれに先立つ平成8年度から単市事業として実施した。平成11年度からは国・県補助事業として実施した。

【単市事業】

単市事業は、すべて津山市教育委員会文化課が主体となって実施した。主な事業概要、経費は次のとおりである。

年度	事業概要
平成8年度	『史跡津山城跡保存整備計画』策定（1年目）
平成9年度	『史跡津山城跡保存整備計画』策定（2年目）
	第1次発掘調査 整備委員会他
平成10年度	備中櫓跡鶴山城址碑移設工事
	津山城跡排水基本調査・備中櫓部地質基本調査委託
	津山城跡石垣立面、勾配測量委託
	第2次発掘調査 文献調査
平成11年度	備中櫓復元整備基本計画書・石垣調査報告書作成委託
	『津山城資料編』刊行 文献調査
	『津山城だより』No.1～3刊行他
平成12年度	備中櫓復元整備工事基本設計委託
	管理道（市道部分）設計委託
	管理道（市道部分）設置工事
	『津山城資料編II』刊行 管理道設置に伴う配電設備等移転
	文献調査他
平成13年度	栗石採集他
平成14年度	文献調査
平成15年度	樹木伐採委託他
	文献調査
	文献調査他
平成16年度	台風禍による石垣修理
	備中櫓復元落成式他
平成17年度～	文献調査他

【国・県補助事業】

国・県補助事業は、平成11年度からである。補助事業の名称は、平成11・12年度が「記念物保存修理事業」、平成12・13年度が「地方拠点史跡等総合整備事業」、平成15～17年度が「史跡等総合整備活用推進事業」、平成18・19年度が「史跡等・登録記念物保存修理事業」の交付決定を受け実施した。

各年度の主な事業概要及び事業費は次のとおりである。

年 度	事 業 概 要
平成11年度	第3次発掘調査 五番門南石垣測量図化業務 管理道設計業務
平成12年度	第4次発掘調査 五番門南石垣修復工事設計業務 五番門南石垣修復工事（2ヵ年事業の1年目） 五番門南石垣修復工事設計監理業務（2ヵ年事業の1年目） 管理道設置工事
平成13年度	第5次発掘調査 五番門南石垣修復工事（2ヵ年事業の2年目） 五番門南石垣修復工事設計監理業務（2ヵ年事業の2年目） 備中櫓復元整備工事実施設計業務 備中櫓復元整備工事（4ヵ年事業の1年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4ヵ年事業の1年目）
平成14年度	第6次発掘調査 備中櫓復元整備工事（4ヵ年事業の2年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4ヵ年事業の2年目）
平成15年度	第7次発掘調査 備中櫓復元整備工事（4ヵ年事業の3年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4ヵ年事業の3年目）
平成16年度	第8次発掘調査 備中櫓復元整備工事（4ヵ年事業の4年目） 備中櫓復元整備工事設計監理業務（4ヵ年事業の4年目） 備中櫓復元整備工事記録DVD作成業務 備中櫓周辺整備工事設計業務
平成17年度	第9次発掘調査 備中櫓周辺整備工事 五番門南石垣土塀復元整備工事 備中櫓周辺・五番門南石垣土塀復元整備工事設計監理業務 天守曲輪西半整備工事設計業務
平成18年度	第10次発掘調査 天守曲輪西半整備工事 天守曲輪西半整備工事監理
平成19年度	第11次発掘調査 天守曲輪西半整備工事 天守曲輪西半整備工事監理 多門櫓石垣修理設計業務

第2部

発掘調査の概要

第1章 発掘調査の記録

第1節 はじめに

これまでに実施された津山城の発掘調査は、平成元年と平成2年に実施された無電柱化に伴うトレンチ調査と、整備計画策定後の発掘調査とに大別される。前者は、都市公園としての工事に伴い実施された確認調査であり、調査成果は報告されている^(註1)。後者は、史跡整備に伴う確認調査で、第1次(平成9年度)～第9次(平成17年度)までは既に『史跡津山城跡保存整備事業報告書I』で報告されている。第9次までの調査は、本丸御殿、備中櫓、及び搦手通路及び門部分の調査が行われ、その結果、後世の攪乱によって削平されている部分はあるものの、遺構は概ね良好な状態で残されていることが判明した。

調査位置は、本丸御殿の調査についてはこれまでの資料悉皆調査により判明している絵図をもとに調査区を設定しており、絵図と発掘調査との対比ができる部分が多くみられた。また、御殿以外の調査についても俯瞰図が多数残されていたため、絵図からの情報と、発掘調査からの所見とを合わせて検討することが可能であった。

今回報告するのは第10次調査(平成18年度)、及び第11次調査(平成19年度)の発掘調査、及び第1次調査(平成9年度)において報告がなされていない出土遺物についてである。第10次調査及び第11次調査においても、絵図資料や文献史料、及び発掘調査成果が大いに参考になった。また、発掘調査で検出した遺構が文献や絵図などと一致する部分のみみられた。

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下のとおりである。

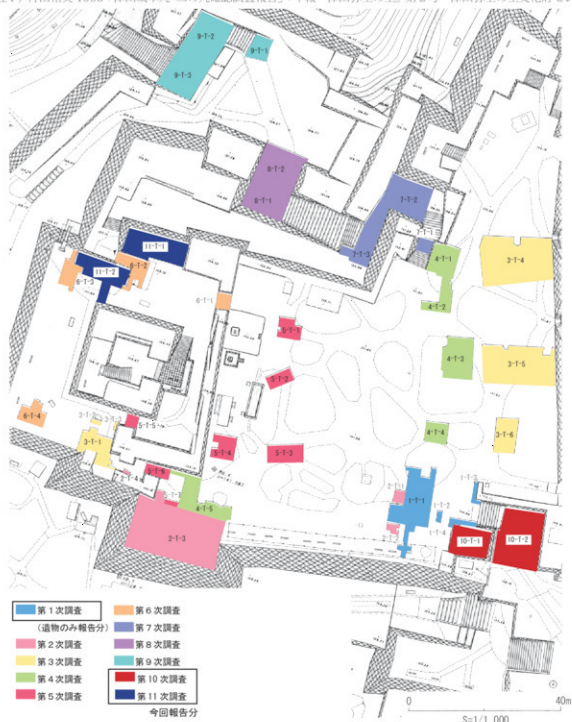
津山市教育委員会	教育長	神崎博彦(平成18年度) 藤田長久(平成19年度) 田村芳倫(平成27年度)
	教育次長	兼田延昭(平成18年度) 田口順司(平成19年度)
	生涯学習部長	松尾全人(平成27年度)
(平成18年度)	文化課長	佐野綱由
	参事	中山俊紀(文化財センター所長)
	主幹	行田裕美(同次長)
	主任	平岡正宏(同主任、調査担当)
(平成19年度)	文化課長	湊哲夫
	参事	中山俊紀(文化財センター所長) 下山純正(同次長)
	主任	平岡正宏(同主任、調査担当)
(平成27年度)	次長	小坂田裕造(文化課長)
	主幹	小郷利幸(文化財センター所長)

係長	仁木康治 (同 次長)
主査	豊島雪絵 (同 主査、報告書担当)
主事	宮崎絢子 (同 主事、報告書担当)

発掘調査にあたっては、史跡津山城跡整備委員会の諸先生方、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の関係者をはじめ、多くの皆さん方からの御教示を得た。また、発掘調査に従事していただいたシルバー人材センターの作業員の皆さん方にもお世話になった。記してお礼申し上げます。

註

(註1) 行田裕美 1995「津山城本丸・二の丸確認調査報告」『年報 津山弥生の里』第2号 津山弥生の里文化財センター



第6図 発掘調査区配置図 (S=1:1000)

第2節 第10次調査（平成18年度）

第10次調査では、本丸の南面に位置する本丸の正門となる表鉄門（おもてくろがねもん）跡、及び本丸御殿玄関部分の発掘調査を実施した。

津山城本丸御殿の入口は、まず表鉄門の門を北向きにくぐって90度西に折れ、石段を登り、さらに90度南に折れたところに西向きの玄関が現れる。絵図によると、玄関の石段を登ると表鉄門の二階（櫓部分）に続き、この櫓内が四十二畳の「広間」になっている。この「広間」を通過して北に折れると本丸御殿の玄関へ通じる渡り廊下に至る構造となっている。



第7図 第10次・11次発掘調査区配置図（S=1:3,000）

調査は、表鉄門の規模、構造の確認、及び表鉄門西側の本丸御殿玄関部分の遺構確認を目的として調査区を設定した。

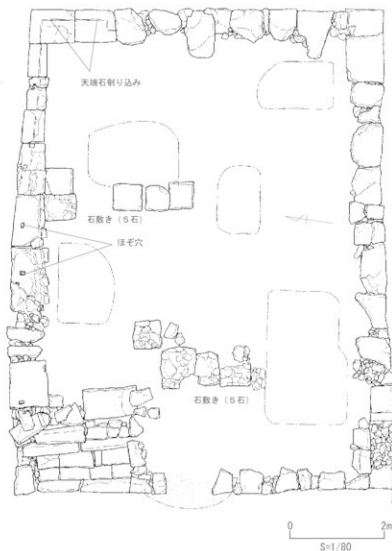
(1) 調査区の概要

調査区1 (第8図)

本丸御殿の玄関にあたる地点に設定した調査区である。文化5年(1808)に描かれた「御城御坐敷向惣繪図」によると、東向きの石段があり、それを上ると石敷きがあり、そこから板敷きの式台上がる構造となっている。

表土を石垣天端面まで除去すると、石垣(表鉄門の櫓台石垣)の裏込石、及び平面正方形で、上面が平らな石が複数検出された。裏込石は詰まった状態ではなく、土と混ざった状態で調査区の全体にみられた。正方形の石は、石垣上面の中央からやや西よりと東よりのところで部分的に検出された。

中央やや西よりで検出された石は計5石あり、1石は列が異なるが、他の4石は南北方向に並んだ状



第8図 第10次調査 調査区1平面図 (S=1:80)

態で検出された。石はすべてが割れた状態で、一辺 60～70 cm の方形を呈する。

中央やや東よりの部分も 5 石が検出された。そのうちの 2 石は櫓台北側石垣に沿って東西方向に並んだ状態で検出され、そこから約 1 石分の間をあけて 3 石が南北方向に並んだ状態で検出された。この 3 石は割れはそれほど激しくはないが、残り 2 石は細かく割れていた。石は南北方向の 3 石が一辺約 50 cm の正方形で、東西方向の 2 石は一辺 50～60 cm である。

これらの石は、本来本丸御殿の玄関に敷かれていた石敷きに使われていた石であったと考えられる。また、これらの石はすべて焼けており、さらに熱によって細かく割れていることから、文化 6 年（1809）に本丸御殿で火災があった際に、この御殿玄関周辺も激しく焼けたことが分かる。

また、調査区北側及び東側の一部の天端石垣上面には直線の列り込みや、ほぞ穴のみられるものがある。この部分は、文化 5 年に描かれた本丸御殿火災前の絵図によると、格子の壁であったと考えられることから、壁の土台木が置かれていた痕跡である可能性が考えられる。

この調査区からの出土遺物はみられなかった。

調査区 2（第 9 図）

表鉄門跡の遺存状況を確認するために設定した調査区である。表土を除去すると、昭和以降に設置された電線や、排水のための土管などが調査区内に巡らされていた。この中で、表鉄門に関連する遺構もしくは近世のものと考えられる遺構は、溝、及び土壇である。

溝 1

表鉄門を通過して本丸に上がる雁木の最下段から東に向かい、6 m ほどのところで南に折れる。南に折れた溝は 8 m ほど南にのび、それ以南は調査区外にのびる。南に折れる部分は後世の電線や時期不明の土壇などによって不明瞭である。溝の幅は概ね 1 m で、深さは 30～40 cm である。本丸に上がる雁木の下では、図化されていないが豊島石製の U 字溝が遺存しており、部分的に蓋がされた状態であった。この蓋も豊島石製である。また、溝 1 の折れ曲がり部分から東に約 2 m のところで、凝灰岩製の石が 2 個並んだ状態で検出された。これらは面を南に揃えていることから、何らかの遺構である可能性が考えられるが、詳細は不明である。

溝 2

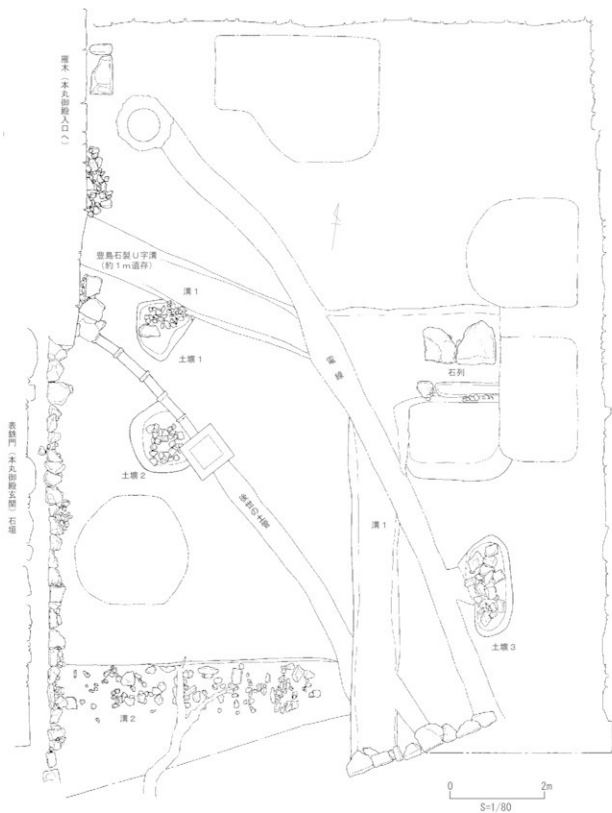
調査区南西、表鉄門櫓台石垣に直交する方向（東西方向）にはしる溝である。東側は削平を受けており、西から 5.8 m がわずかに残る。溝の落ち込みは北側のみ遺存しており、南側の落ち込みは不明瞭だが、溝の内側に一辺 20～50 cm 程度の角礫が散乱しており、その範囲から、幅は 1 m 程度であることが推測される。溝の深さはわずか 5～10 cm である。出土遺物はなく、近世の遺構であるかどうかは不明である。

土壇 1

調査区の西寄り、本丸に上がる雁木から約 1.5 m 東で検出された。一部溝 1 に切られている不整形の土壇である。深さは 5 cm～10 cm と浅く、内部には拳大の円礫がみられる。近世の遺構であるかは不明である。

土壇 2

土壇 1 の南 2.5 m のところに位置する土壇である。後世の土管によって一部を削平されている。直径



第9図 第10次調査 調査区2平面図 (S=1:80)

75 cm、深さ 20～25 cmをはかる。内部に拳大の円礫がみられる。

土壌 3

南に延びる溝 1 の東約 2.5 m のところで検出された土壌である。長円形を呈し、長径 210 cm、短径 80～90 cm、深さ 5～10 cmをはかる。内部に一辺 20～40 cmの角礫を中心とした石の集積がみられるが、近世の遺構であるかどうかは不明である。

以上、溝及び土壌など、近世の遺構である可能性のあるものについて取り上げたが、多くは削平を受けているため、表鉄門の基礎に関係する遺構であるかは判明しなかった。

(2) 出土遺物 (第 10 図・11 図)

遺物は掘削の際に調査区 2 の一帯から出土したもので、遺構に伴うものはみられなかった。ほとんどが陶磁器と瓦である。

陶磁器

1・2 は肥前系磁器と考えられるもので、1 は碗、2 は蓋である。1 は口径 11 cm、2 は口径 9.4 cm、高さ 2.4 cmをはかる。

3・4・6 は陶器の碗で、同形態のものである。3 の見込みには「大」の文字が描かれ、底部には三足ハマの熔着痕が残る。また、6 の外底部には文字ははっきりしないが墨書がみられ、そのうちの一文字は、「詰」と描かれているようにも見える。3、4 ともに口径 11.2 cm、高さ 6.3 cmをはかる。

5 は、肥前系磁器と考えられる鉢である。内面及び底部に格子目の文様が施されている。高台部分及び見込みに蛇の目刺利ぎの痕跡がみられる。口径 12 cm、高さ 3.7 cmをはかる。18 世紀後半～19 世紀前半頃。

7 は関西系陶器で、行平鍋の蓋である。上面にはイッチン掛けがなされている。上面の一部と内面には鉄釉が施されている。口径 14 cm、高さ 3.6 cmをはかる。

8・9 は蓋、灯明皿である。8 は上面に、9 は内面に灰釉が施されている。8 は口径 8.4 cm、高さ 1.6 cm、9 は口径 10 cm、高さ 1.7 cmである。

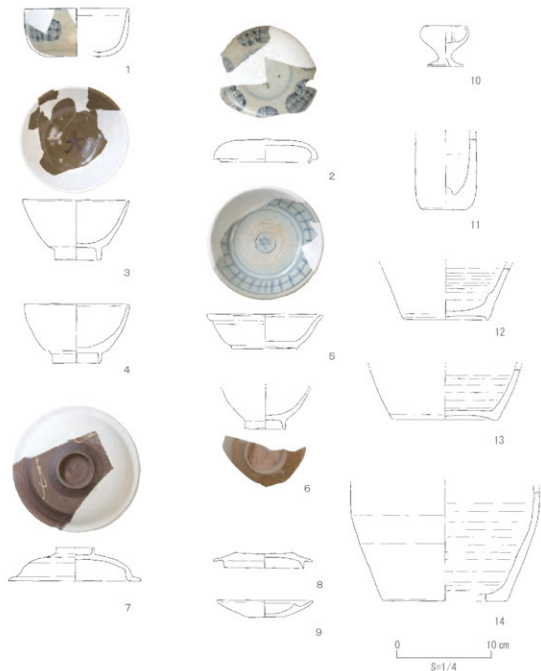
10 は素焼きの燭台で、口径 4.4 cm、高さ 4.3 cmをはかる。11 は焼塩壺の底部である。内面へら削りが施されているがかなり分厚いつくりである。12～14 は徳利の底部である。

瓦

15・16 は巴文軒丸瓦で、ともに右巻きである。15 は巴が全体的に細い。直径 13.2 cm、文様区径 9.5 cm、巴文径 5.4～5.6 cm、珠文数 16。16 はやや大きく、直径 16.4 cm、文様区径 11 cm、巴文径 7.4～7.6 cm、珠文数 16 である。

17・18 は軒平瓦である。いずれも均整唐草文が施されている。いずれもこれまでの津山城の発掘調査で出土した瓦にみられる文様である。

19～21 は棟込瓦で、菊花文がみられるものである。このうち、21 は他よりもやや小型で、菊の花弁が盛り上がっている。19 は直径 10 cm、20 は直径 9.6 cm、21 は直径 9.2 cm、文様区径 7.2 cmをはかる。

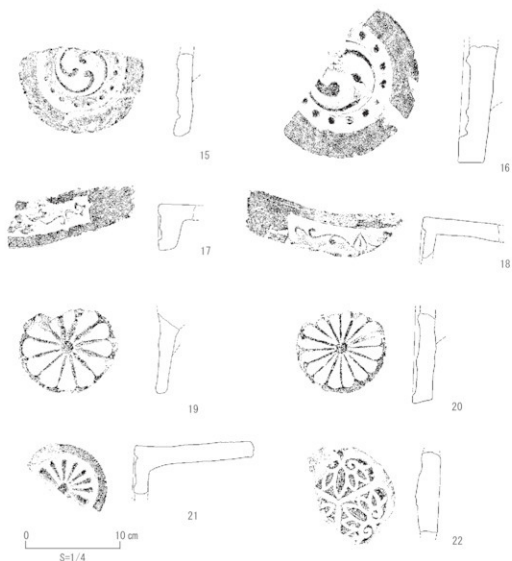


第10図 第10次調査出土遺物1 (S=1:4)

22は三つ葉葵が施された瓦であるが、部位は不明である。瓦当面にキラ粉が付着している。これらの瓦類の前後関係については不明だが、概ね幕末に近い段階のものである可能性が考えられる。

(3) まとめ

表鉄門については、後世の削平により、遺構の残存状態が悪く、門に関する遺構は発見できなかった。いくつかの土壇については、門の礎石の抜き取り痕である可能性も考えられるが、確実なものはない。本丸御殿の玄関部分については、四角形の石が並んでいる状態が所々でみられることから、文化5年(1808)の「御城御座敷向惣絵図」に描かれている玄関の石敷きの部分が、発掘調査においても確認さ



第11図 第10次調査出土遺物2 (S=1:4)

れた。また、この部分で検出された石については割れが著しいものばかりであり、部分的に被熱しているところもことから、文化6年(1809)の本丸御殿火災の際に、表鉄門周辺も被災していることが確認できた。

遺物は、陶磁器、瓦などが出土しており、陶磁器については概ね18世紀～19世紀代のものと推測され、肥前系のもののほか、関西系のもなどがある。この他、見込みに「大」が描かれた陶器碗については、過去の本丸御殿の発掘調査でも出土しており、特別につくられたものである可能性が推測される。産地については不明だが、在地系のものである可能性が考えられる。

1. 調査区1 調査前 (西から)



2. 調査区1 調査前
(南西から)



3. 調査区1 調査前
(南東から)





1. 調査区1石敷遺構
(南から)



2. 調査区1石敷遺構
(西から)



3. 調査区1石垣及び石敷
遺構 (東から)

1. 調査区1北側天端石と
石敷遺構（西から）



2. 調査区1 栗石検出状況
（北東から）



3. 調査区1 石敷遺構
（南東から）





1. 調査区1石敷の石拡大
(西から)



2. 調査区1天端石の割り
込み拡大(西から)



3. 調査区2調査前
(南東から)



1. 調査区2調査前（西から）



2. 調査区2全景（東から）



3. 調査区2全景（北から）



1. 調査区2全景（西から）



2. 調査区2全景（南西から）



3. 土壇1（西から）



1. 土壇 2 (北西から)

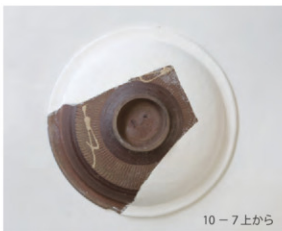


2. 土壇 3 (北から)



3. 溝 1 石列 (北から)





10-7上から



10-8



10-7



10-9



10-10



10-11



10-12



10-13



10-14

第3節 第11次調査（平成19年度）

第11次調査では、天守曲輪周辺の整備に伴う遺構確認のため、七番門北石垣、本丸天守曲輪北側多門櫓腰石垣、及び腰石垣と天守台北面石垣との間の通路部分の調査を実施した。

（1）調査区の概要

調査区1 七番門北石垣（第12図）

七番門は天守曲輪から二の丸へ接続する門である。門は天守曲輪から雁木を下った低いところに西側に開口して位置する。門の東側は梯形虎口となっており、門の南北両側及び東側には低い石垣がみられる。

発掘調査では、七番門の北側に位置する高さ約1mの石垣上面の掘削を行った。石垣天端の平面幅は、七番門の櫓台部分が幅6.7～7.4mであり、東側の長櫓石垣に向かってのびる部分は幅6.4mと幅が狭くなっている。石垣の上面の土を除去し、石垣の天端を検出すると、石垣の内側はすべて栗石で充填されていた。中央部には、長さ40～70cmの上面が平らな石が東西方向に6個並んでおり、長櫓石垣に接する東端では、中央部に加えて南北に1個ずつ並んでいた。検出された石は全部で8個である。これらの石は栗石上ではなく、栗石を20cm程度除去したところからみついている。石の間隔は東西方向で2.5mで、西端の石の部分は3mである。南北方向は2mである。これらの石は七番門櫓台部分とそれにつながる建物の基礎の石と考えられる。

調査区2 七番門南石垣及び多門櫓腰石垣（写真1～3）

七番門の南に位置する石垣である。東側は七番門の櫓台石垣であり、西側は多門櫓腰石垣である。石垣の高さは七番門南石垣部分で約1.5m、多門櫓腰石垣部分で1～1.5mである。

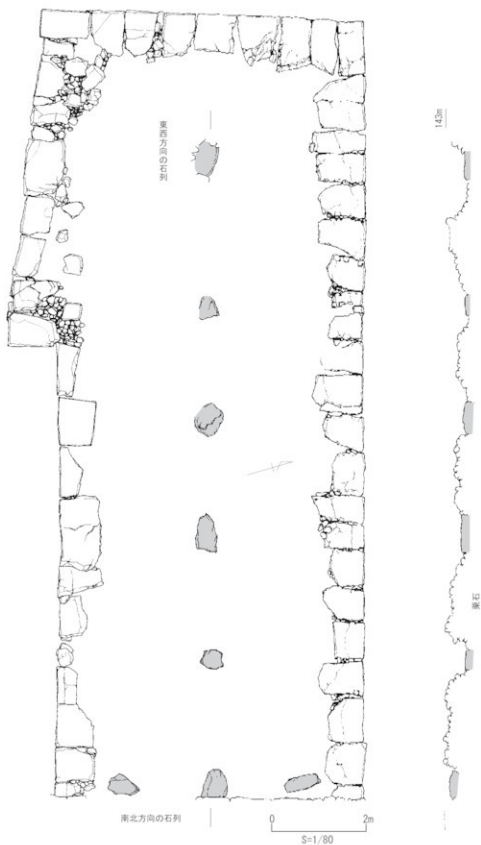
今年度の整備工事でこの石垣の南面を解体修理するのに伴い、石垣天端の発掘調査を実施した。七番門南石垣と同様、石垣の内側はすべて栗石が充填されていた（写真1）。

また、七番門櫓台石垣の西面を確認するため、多門櫓腰石垣の東端を掘り下げたところ、櫓台石垣の西面石垣が確認できた（写真2）。

さらに、南面の石垣を解体・修理するため、基底部まで掘削したところ、石垣に平行して暗渠排水溝が検出された（写真3）。排水溝は、今回の調査では石垣の南側で約14mにわたって確認された。溝は豊島石製で、U字に加工したものを複数連結させることによって造られている。検出した排水溝の西側では蓋石がみられず、溝内に瓦が多数検出された。これに対し東側では、溝の上に凝灰岩製の蓋が遺存していたことから、排水溝は、多門櫓腰石垣部分では開渠で、七番門南石垣付近では暗渠になっていた可能性が考えられる。

この排水溝は、第6次調査（平成14年度）において七番門周辺及び多門櫓部分の調査を行った際に部分的に確認されている溝に接続する。つまり、この豊島石製の排水溝は、多門櫓に沿って南北方向に設置され、腰石垣にぶつかったところで東方向に直角に曲がり、その後七番門の雁木の下を通過して七番門の中心を抜け、西側の石垣に取り付くことになる。

多門櫓腰石垣南面の解体修理工事に伴い、新たに発見された埋没石垣については、次章の整備工事の



第12図 第11次調査 調査区1平面図 (S=1:80)

ところで記述する。

調査区3 天守台石垣と多門櫓腰石垣間の通路（写真4）

七番門南石垣及び多門櫓腰石垣に直交する形で設定した調査区である。天守台石垣との間の通路部分に該当する箇所である。

表土を除去すると、その直下から石垣が検出された。石垣は西に面を向けており、少なくとも幅3m、高さ1.5～2mの規模で遺存していた（写真4）。石垣の両端は、北は多門櫓腰石垣、南は天守台石垣によって破壊されていると考えられる。

埋没石垣は、これまで備中櫓の調査や、後述する多門櫓整備工事に伴う調査などでも見つかり、築城の過程を知る上で重要である。



写真1 調査区2 七番門南石垣及び多門櫓腰石垣調査区（南から）

（2）出土遺物（第13図～16図）

遺物は瓦類が大半を占め、陶磁器はごくわずかであった。瓦類は、七番門北石垣と多門櫓腰石垣上面から出土している。瓦については、コンテナに20箱程度出土しているが、ここでは代表的なものをとりあげている。

軒丸瓦

1～3はともに多門櫓腰石垣からの出土である。1は完形品で、巴文は左巻きである。凹面はコピキB痕がわずかにのこる。全長31.4cm、直径16.2cm、文様区径12.3cm、巴文径7.4～7.8cm、珠文数は13個である。2は同じく左巻きの巴文で、直径約16cm、文様区径12cm、巴文径7.2cmをはかる。



写真2 調査区2 七番門南石垣西面（東から）

凹面は布目、及びコピキB痕がわずかにのこる。3は1・2と比べて極端に巴が細い。直径15cm、文様区径10.6～10.8cm、巴文径5.5cm、珠文数は12個である。

4・5は大型品で、いずれも多門櫓腰石垣周辺から出土した。4は直径21cm、文様区径14.8cm、巴文径10cm、珠文数15個である。5は直径21.6cm、文様区径14cm、巴文径7.4cm、珠文数13個である。4は左巻き、5は右巻きであ



写真3 多門櫓腰石垣南の排水溝（東から）

る。

軒平瓦

6・7は多門櫓腰石垣から出土したものである。中心飾りは桐の葉で、葉脈が細かく表現されており、立体的である。唐草は2転である。いずれも瓦当上縁が面取りされている。6・7ともに瓦当面部分の長さは6.7 cmをはかる。8は多門櫓腰石垣の雨落溝から出土したもので、6・7の桐の葉の立体感はなく、線刻で描かれているが鮮明である。唐草文は中心飾りの上から延びており、2転で、いずれも上方向である。幅25.6 cm、瓦当面の長さ5.3 cmをはかる。9は同じく三葉のものであるが、葉が丸みを帯びている。唐草文は2本の線で1つの草を表している。瓦当面の長さ4.4 cm。10の中心飾りは宝珠で、唐草文は2転である。瓦当面の長さは4.5 cmである。瓦当上縁が面取りされている。11は文様が不鮮明だが、中心飾りに葉の表現がみられ、そこから唐草文が3転する。今回の調査

で出土した瓦の中で唐草文が3転のものはこの1つのみである。瓦当面の長さ4.6 cm。12は3本の軸の先端が3方向に枝分かれする中心飾りをもつ。唐草文は2転である。瓦当面の長さ5.4 cmで、瓦当上縁がわずかに面取りされている。13は瓦当面にキラ粉が付着している。瓦当面の長さ7.4 cm。

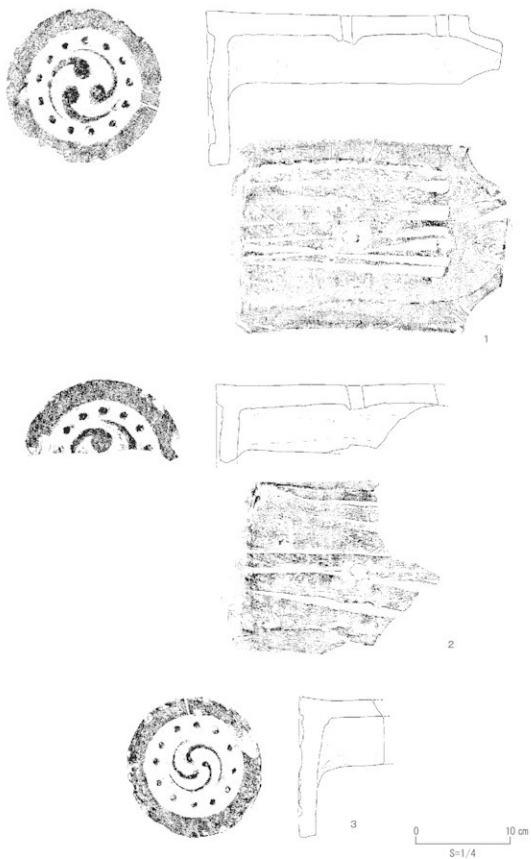
9～11・13は七番門櫓台表土から、12は多門櫓腰石垣周辺からの出土である。

その他の瓦

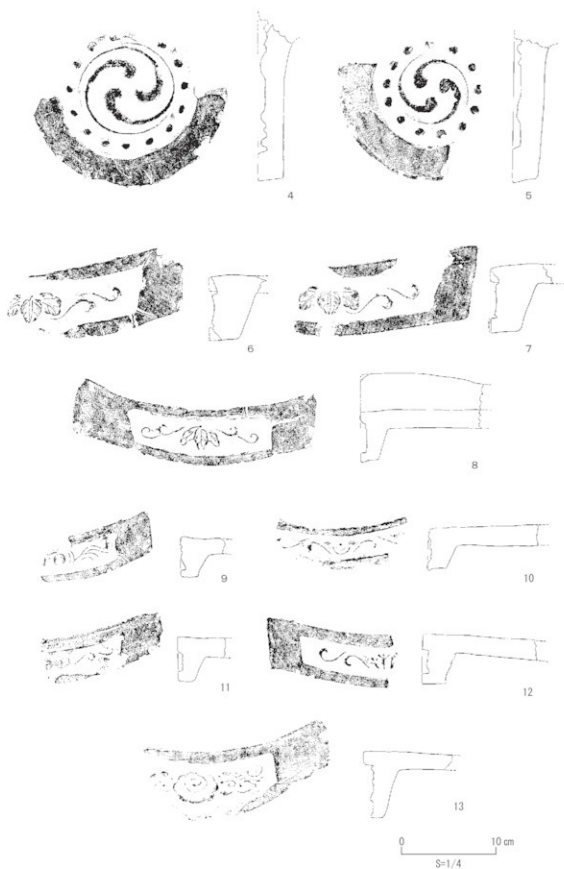
14は隅軒平瓦で、平面形が三角形に切れ、側縁に立ち上がりが見られる。瓦当文は中心飾りが宝珠で、上部から唐草文が2転半のびている。瓦当面の長さは5 cmである。瓦当上縁がわずかに面取りされている。15は隅角の軒丸瓦で、底部に外形に沿ったヘラ描の線がみられる。瓦当面は左巻きの巴文で、直径14.8 cm、文様区径11.2 cm、巴文径7 cm、珠文数は12個である。16は鳥衾瓦である。瓦当文は蓮華文が少しくずれたような文様であり、津山城ではこれまでに出土例がない文様である。



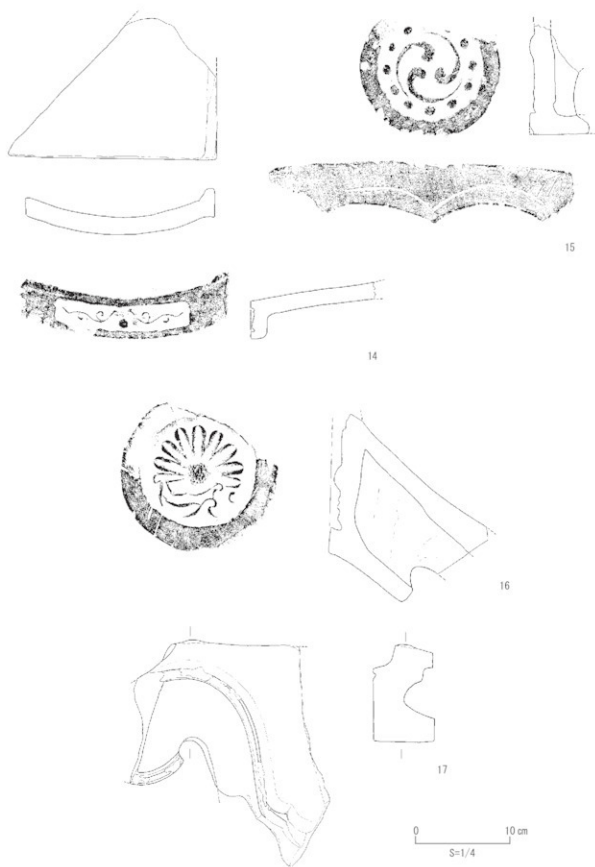
写真4 天守台北側通路部分埋没石垣（西から）



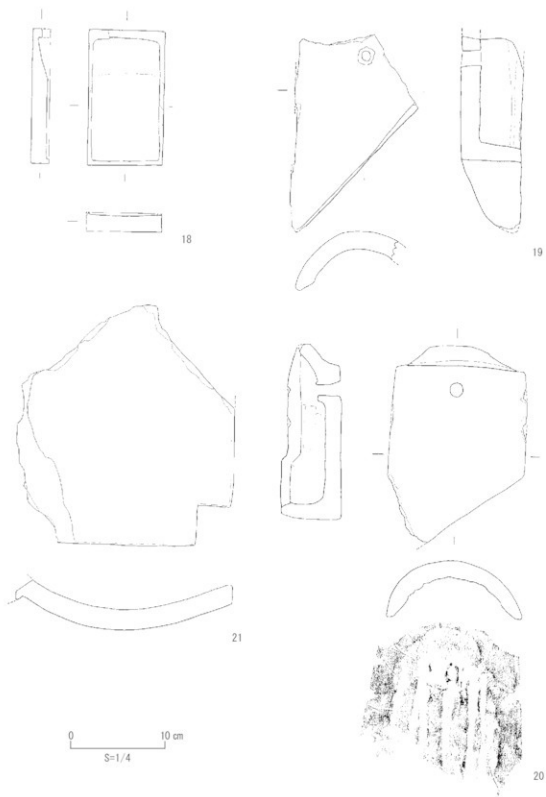
第 13 図 第 11 次調査出土遺物 1 (S = 1 : 4)



第14図 第11次調査出土遺物2 (S=1:4)



第15図 第11次調査出土遺物3 (S=1:4)



第 16 図 第 11 次調査出土遺物 4 (S = 1 : 4)

直径は 16.5 cm、文様区径は 12 cm である。17 は鬼瓦の一部である。19・21 は無文の圓軒丸瓦で、いずれも丸瓦を斜めに切り、半瓦当面を付ける。21 の幅は 14.5 cm である。20 は椀瓦である。

以上の瓦類は 14 が多門櫓腰石垣周辺、15・16・19 が多門櫓腰石垣表土、20 は多門櫓腰石垣雨落溝、17・21 が七番門櫓台からの出土である。

石製品

18 は長方形の礎である。長さ 14.2 cm、幅 8 cm をはかる。多門櫓腰石垣表土からの出土である。

(3) まとめ

第 11 次調査は、天守曲輪内部の発掘調査であった。七番門北石垣上面からは建物の基礎になると考えられる石列を確認した。七番門南石垣とそれに続く多門櫓腰石垣の調査では、建物の雨落溝と考えられる豊島石製の排水溝を確認し、本丸周辺の排水構造をより明らかにすることができた。また、調査を行った門や櫓の石垣の内部は、すべて栗石で充填されていることも判明した。多門櫓腰石垣と天守台北面石垣との間の通路部分の調査では、南北方向で、西面する埋没石垣を新たに確認し、築城過程の一端を伺い知ることができた。

出土遺物については、天守曲輪内部の調査であるためか、遺物のほとんどは瓦類で、陶磁器についてはほとんど出土しなかった。軒丸瓦の中には、直径 20 cm を超える大型品も出土した。これらの大型品については、過去の本丸周辺の調査でも出土しており、櫓、及び門周辺の調査では出土しないことから、天守あるいは本丸御殿に葺かれた瓦であったことが推測される。

軒平瓦についても、中心飾りが桐の葉の大型品は、瓦当面の上端が面取りされていることから、出土した瓦の中でも古い様相のものであり、大型の軒丸瓦に伴い用いられたのもであると推測される。他の軒平瓦についても、中心飾りの文様はこれまでの調査でも確認されている文様で、今回新たに発見されたものはみられない。今後出土遺物の整理にあたり、系統的に分類が可能か検討する必要がある。

1. 調査前全景 (南から)



2. 調査区1 調査前 (南から)



3. 調査区2・3 調査前 (南から)



第11次調査 図版2



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区1全景（南から）



3. 調査区2全景（南から）



1. 調査区3全景（南から）



2. 調査区1西半部（東から）



3. 調査区1東半部（東から）



1. 調査区2七番門南石垣
(南から)



2. 調査区2排水溝(南西から)



1. 調査区 2 排水溝 (西から)



2. 調査区 2 排水溝 (東から)

3. 調査区 2 七番門南石垣西面
検出状況 (北西から)





1. 調査区2多門櫓腰石垣栗石
検出状況(東から)



2. 調査区3天守曲輪通路部分
埋没石垣検出状況(北から)



3. 調査区3埋没石垣全景
(西から)

1. 調査区3埋没石垣全景
(北西から)



2. 調査区3埋没石垣全景
(南西から)

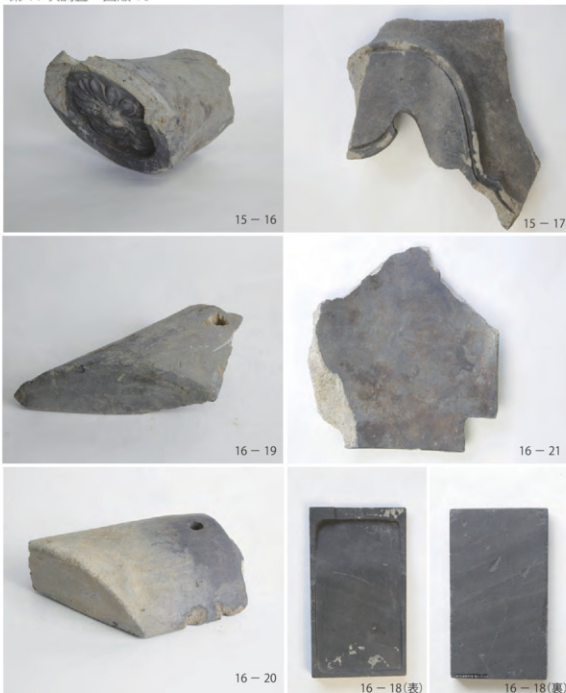


3. 中学生職場体験









第11次調査出土遺物3



第4節 第1次調査(平成9年度)出土遺物

(1) はじめに

平成9年度に実施した第1次調査は、本丸入口部分を中心に行った。

出土遺物の大半は、トレンチ1からのものである。この調査区は、本丸台所門周辺にあたる部分であり、埋土中から多数の陶磁器が出土した。また、排水施設として木製柵や木樋などがみつかったため、これに伴う鉄釘も多数みつかった。

今回報告するのは、『史跡津山城跡 保存整備事業報告書I』に掲載されていない出土遺物についてである。出土地点のトレンチ番号、遺構名については、報告書の番号、名称によるものであり、詳細はそちらを参照されたい。

(2) 出土遺物(第17図～21図)

陶磁器類(第17図・18図)

1～10は陶器碗である。1～5はセットになると考えられる京・信楽系の小杉碗で、18世紀末～19世紀頃のものである。外面には灰釉が施され、下半部に同一の若杉の文様が鉄絵で描かれている。口径10.8～11.4cm、高さ5.4～5.8cmをはかる。3の高台内には墨書がみられるが小片のため判読できない。6・7は無文だが、同系統の碗で、胎土は緑灰色を呈する。6は口径10.8cm、高さ6cm。7は口径10cm、高さ5.6cmをはかる。高台を除く部分に灰釉がみられる。7の高台内には墨書が見られるが小片のため判読できない。8～10も緑灰色を呈する同系統のものである。8の高台内部には「御次」、の文字、9の高台内部には縦に並んだ●2つを□で囲った印、10の高台内部には「儀」の文字が墨書で描かれている。9は口径10cm、高さ6cmをはかる。11は高台部を欠くが、やや深めの碗である。口径11cmである。

12・13も陶器碗の小片である。見込みには、「大」の文字がある。12と13では文字の太さや色調が異なり、12は染付によるものである。

14・15も陶器碗であるが、1～13と異なり、暗赤褐色を呈し、外面及び内面に鉄釉が施されている。見込みには「大」の文字が描かれている。14は、松平家の合印である「剣大」を象ったものであり、15は単なる「大」の文字が描かれている。19世紀代のもと考えられる。14は口径11.5cm、高さ5.3cm、15は口径11.5cm、高さ5.6cmである。

16～20は陶器碗である。17・19・20は肥前系の陶胎染付で、18世紀代のもと考えられる。16・18についても同様のものと推測されるが、不明である。16は口径11cm、高さ7cm、17は口径10.2cm、高さ6.8cm、19は口径10cm、高さ6.8cmをはかる。

21～25は陶器皿である。21・22は暗緑灰色を呈する。見込みには、「膳」と描かれている。また、焼成の際の熔着を防ぐための三足ハマの圧痕が付着している。23・24は緑灰色を呈するもので、23の見込みには文字が刻まれている。また、高台内面にも墨書で文字(「膳」か?)が描かれているが破片のため判読できない。24の内面には「御膳方」と描かれており、外面の高台内面には、「蝶」の墨書がみられる。21・22と同様、見込みに三足ハマの痕跡が残る。25も同様の緑灰色を呈し、波状の口



第17回 第1次調査出土遺物1 (S=1:4)



第18図 第1次調査出土遺物2 (S=1:4)

緑をもつ。これらはすべて灰釉陶器で、21は口径13.2cm、高さ2.4cm、22は口径12.8cm、高さ2cm、23は口径11.4cm、高さ2.3cm、24は口径11cm、高さ2.3cm、25は口径13.7cm、高さ3cmをはかる。

26は徳利で、灰釉の上に鉄絵が描かれている。1～5の碗に色調が類似していることから、京・信楽系のもと考えられる。

27は肥前系磁器の染付碗である。外面に人物が描かれ、見込みには五弁花文がみられる。18世紀代のものと考えられる。口径8.8cm、高さ5.3cm。28は関西系磁器の端反碗である。染付で内面に「長」「貴」の銘がみられる。「富」「貴」「長」「春」の吉祥句であると考えられる。焼き継ぎ痕がみられる。口径11.2cm、高さ6cmをはかる。19世紀半ば以降のものと考えられる。29は瀬戸美濃系の陶器碗で、高高台をもつ太白茶碗である。18世紀末～19世紀前半のものと考えられる。30は関西系磁器の端反碗である。唐草文が描かれている。口径9.2cm、高さ4.7cmである。31も関西系磁器と考えられる小碗で、口径8.4cm、高さ4.4cmをはかる。32～34は産地は不明だが染付の陶器小皿である。32、33は同型のもので、見込みには草が描かれている。口径9.5cm、高さ2.5cm。34は口径10cm、高さ2.2cmをはかる。35は肥前磁器と考えられる皿である。18世紀代のものと考えられる。口径13.8cm、高さ3cm。36～38も草花文のある陶器皿で、38は口径9.8cm、高さ2cmをはかる。39は肥前系磁器の猪口である。18世紀末～19世紀のものと考えられる。口径7.8cm、高さ5.9cmをはかる。40は陶器の鉢である。外面には牡丹が描かれており、内面には船と思われる文様が描かれている。口径15.4cm、高さ8cmをはかる。

出土地点は、31・36・37がトレンチ2で、それ以外はすべてトレンチ1からのものである。

素焼の土器類・その他（第18図・19図）

41・42は土師質の碗である。いずれもロクロによる回転ナデの痕跡がみられる。42は口径10cm、高さ5.3cmをはかる。43は土師皿である。口径10cm、高さ2.8cm。44は焼塩壺である。内面にケズリが施されている。45・46は香炉か火鉢の類と考えられる。45の底部は3方向に脚が付き、下段には長方形の、上段には円形のスカシ孔が穿たれる。46は下部が円筒形を呈し、屈曲して上に向かって広がる形状をなす。円形のスカシ孔がある。内面はハケ状工具による調整がみられる。45は底径15cm、46は底径11.4cmである。

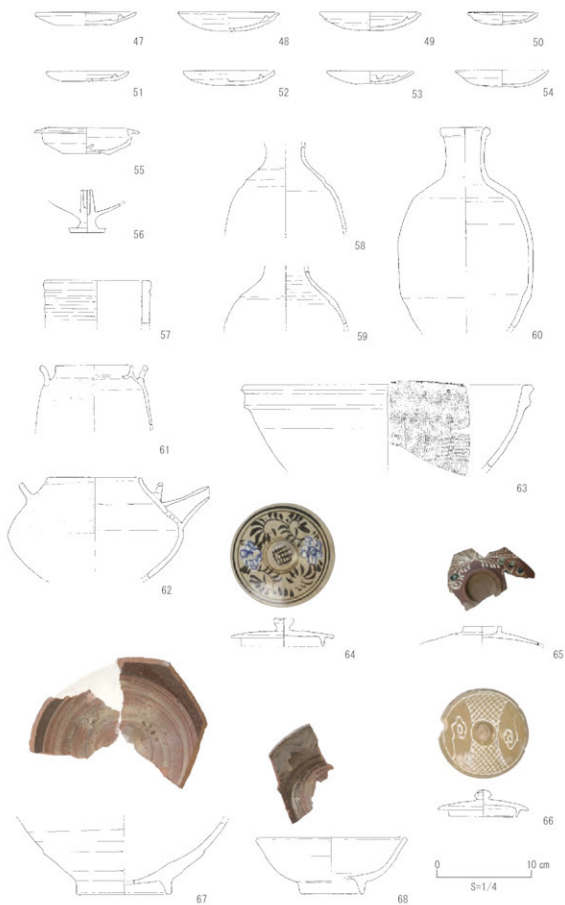
47～53はいずれも備前焼と考えられる灯明皿である。47の底部には回転糸切り痕がある。54は小皿である。47は口径10.7cm、高さ1.3cm、48は口径10.7cm、高さ1.8cm、49は口径10.7cm、高さ1.8cm、50は口径7.5cm、高さ1.2cm、51は口径8.7cm、高さ1cm、52は口径9.6cm、高さ1.3cm、54は口径9.7cm、高さ1.7cmをはかる。55は土瓶の蓋で、蓋の表面には鉄軸が施されている。口径8.6cm、高さ2.6cm。56は燭台と考えられる。外面には鉄軸が施されている。57は鉢の口縁部である。

58～60は徳利で、いずれも外面に鉄軸が施されている。いずれも在地系のものと考えられるが、産地は不明である。

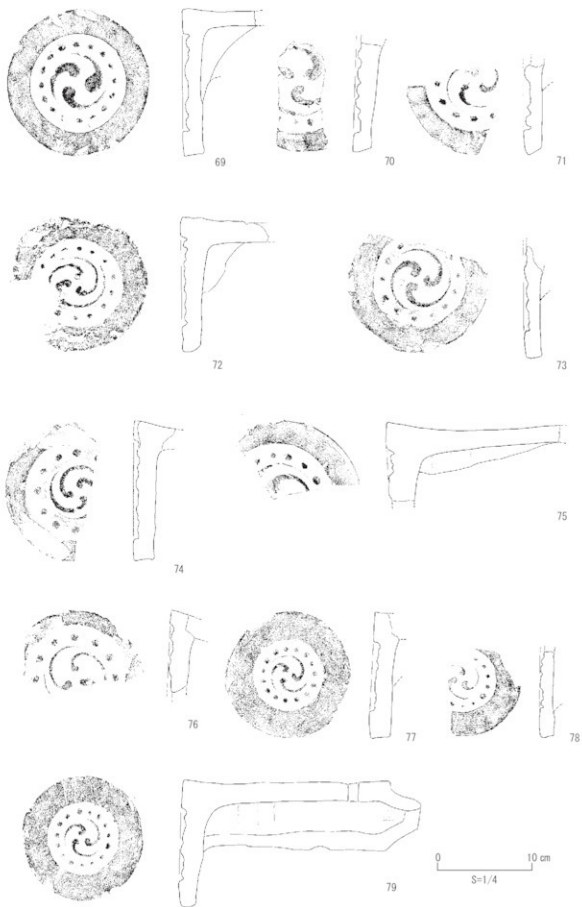
61・62は関西系陶器の土瓶である。61の内面には透明釉が施されている。62は灰釉陶器の土瓶である。61の口径は8.2cm、62の口径は10cmをはかる。

63は播鉢である。在地系のものと考えられるが産地は不明である。口径30cmをはかる。

64～66は関西系陶器の蓋である。64は京焼で、外面には灰釉の上に鉄絵による装飾が施されてい



第19圖 第1次調査出土遺物3 (S=1:4)



第20図 第1次調査出土遺物4 (S=1:4)

る。蓋の裏面には「錦光山」の焼印がみられる。19世紀代のものと考えられる。65・66の外面はイチチン掛けて装飾が施されている。64は直径10.8cm、高さ2.9cm、66は直径9.6cm、高さ2.8cmをはかる。

67・68は肥前系陶器の片口鉢で18世紀代のものと考えられる。68の口径15.6cm、高さ5.9cmをはかる。

出土地点は、53、57、66がトレンチ2、それ以外はトレンチ1からのものである。

瓦(第20図～21図)

出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦などである。

69～79はすべて軒丸瓦である。69～73は左巻きの巴文で、69・70は巴がやや太く、それ以外は少し細い。瓦当面にキラ粉付着。69の直径は15.5cm、文様区径10.3cm、巴文径6cm、珠文数16、71は直径17.2cm、文様区径13.4cm、巴文径5.2～5.7cm、珠文数12個、72は直径14cm、文様区径9.3cm、巴文径5.3～5.8cm、珠文数14個、73は直径15cm、文様区径10cm、巴文径6～6.4cmをはかる。74～76は右巻きの巴文である。特に76の巴は頭部と尾部の太さの違いが明瞭である。74の直径14.5cm、文様区径10cm、巴文径5.6～5.8cm、珠文数12個、75が直径16.8cm、文様区径11cm、珠文数は推定16個、76が直径約14.4cm、文様区径10.8、巴文径6.6cm、珠文数は12個である。

77～79はすべて左巻きの巴文のあるもので、77が直径13.6cm、文様区径7.5cm、巴文径3.6～3.8cm、珠文数15個、78が直径12cm、文様区径7cm、珠文数は推定14個である。79は全長25.5cm、直径13.6cm、文様区径7.5cm、巴文径3.6～3.8cm、珠文数15個である。3個体とも1～8に比べると文様区径が小さく、巴が細く、シャープな印象を受ける。

69～79はすべてトレンチ1からの出土で、中でも77・79は溝1からの出土である。

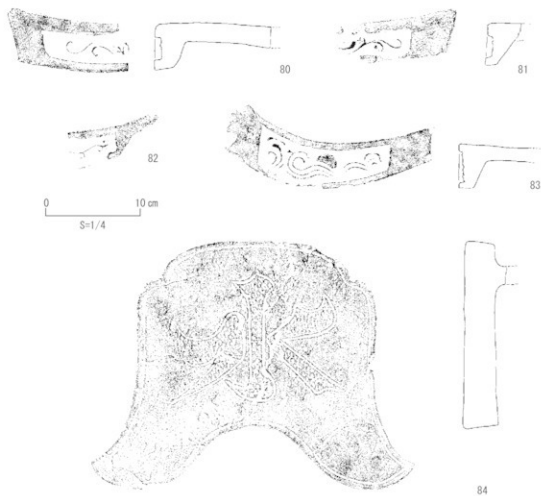
80～83は軒平瓦である。80は3本の軸の先端が3方向に枝分かれる中心飾りをもつ。唐草文は2転である。瓦当上縁が広く面取りされている。瓦当面の長さ5cm。81は中心飾りが宝珠のもので、唐草文は2転である。瓦当上縁が面取りされている。瓦当面の長さは4.3cm。82は破片であるが、唐草文が3転で、出土瓦の中では古相のものである。83は波状文の中心に半円形のあるもので、出土瓦の中で新相のものといえる。瓦当面にキラ粉が付着している。瓦当面の長さ4.7cm。

84は鬼瓦である。中心には防火の意味を表すとされる「水」の文字が刻まれている。長さ26.5cm、幅34.5cm、厚さ3.5cm。

80～84の瓦はすべてトレンチ1からの出土である。

(3) まとめ

平成9年度の調査では、おびたしい数の陶磁器が出土した。これらのものを大きく分けると、関西系のもの、肥前系のもの、瀬戸美濃系のものなどがみられる。また、見込みに「大」が描かれた陶器碗や、「賄」と描かれた陶器皿などがあり、これらについては、特別につくられた器類であった可能性が考えられる。産地については明確ではないが、在地産である可能性が考えられる。津山城跡出土の陶磁器については、在地産あるいは山陰・山陽地方出土の陶磁器との違いなど、まだ不明な点があり、今後の検



第21図 第1次調査出土遺物5 (S=1:4)

討課題としたい。

出土遺物の年代については18世紀から19世紀代のもので、それ以前に遡るものはみられないことから、廃城となるまで御殿が継続的に使用されていたことが分かる。また、これだけ多くの陶磁器が出土したのは、調査地点が本丸御殿の台所周辺であったことにも起因すると考えられる。「御膳方」、「膳」のような文字の描かれた陶器はまさに「台所」ならではの出土遺物といえよう。





17-9



17-9 墨書



17-10 墨書



17-11



17-12 内面「大」



17-13 内面「大」



17-14



17-14 内面「大」



17-15



17-15 内面「大」



17-16



17-17



17-18



17-19

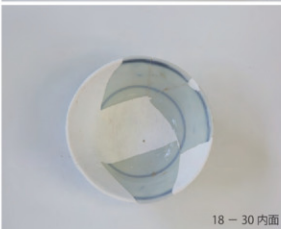


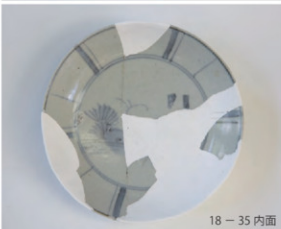
17-20

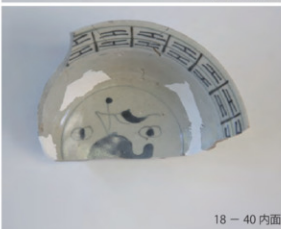
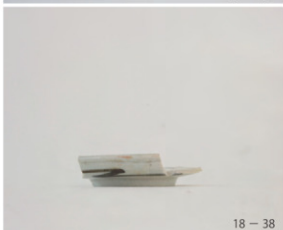


17-21





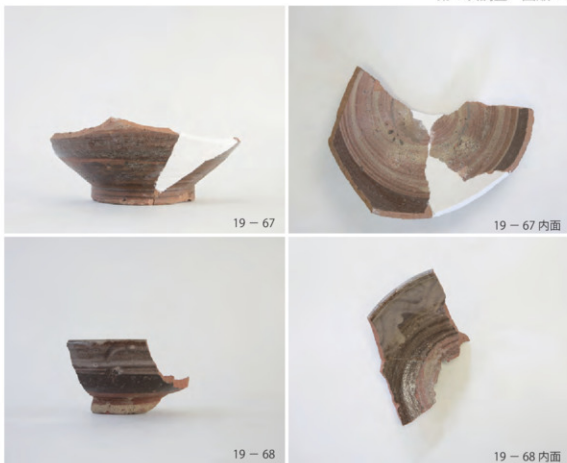












第1次調査出土遺物 11







21-84(表)



21-84(裏)

第3部

整備工事の概要

第1章 天守曲輪西半整備工事（平成18年度）

第1節 事業の概要

（1）事業に至る経過

平成13年度～17年度にかけては、本丸南側に位置する備中櫓の復元及びその周辺の工事を実施してきた。

天守台周りを高さ4m程度の石垣で囲った空間である「天守曲輪」は備中櫓の北側、本丸西端にあり、これまで整備がなされていなかったことから、来城者が江戸時代の建物配置や通路などを理解しにくい状況であった。

備中櫓の復元と、その東に隣接する長局の平面表示、西に隣接する五番門の石垣修理など、本丸南側の整備が進みつつある中、北側に隣接する天守曲輪部分についても、発掘調査や文献資料の調査を行い、継続的に整備を実施することとした。

天守曲輪は、本丸御殿のある部分とは南は五番門、北は八番門とで仕切られており、天守を中心とした独立性の高い空間である。この部分を整備することにより、近世城郭としての津山城を視覚的に理解できるようになり、備中櫓から天守曲輪に至る見学者のための動線がつけられることが期待できた。

今回の整備工事は、天守曲輪の西側に位置する多門櫓の平面表示を実施した。

整備工事は平成18年度の単年で実施した。

工事は史跡津山城跡整備委員会、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の指導・助言のもと実施した。

（2）事業体制

事業は津山市教育委員会が直営で実施した。

（3）事業の経過

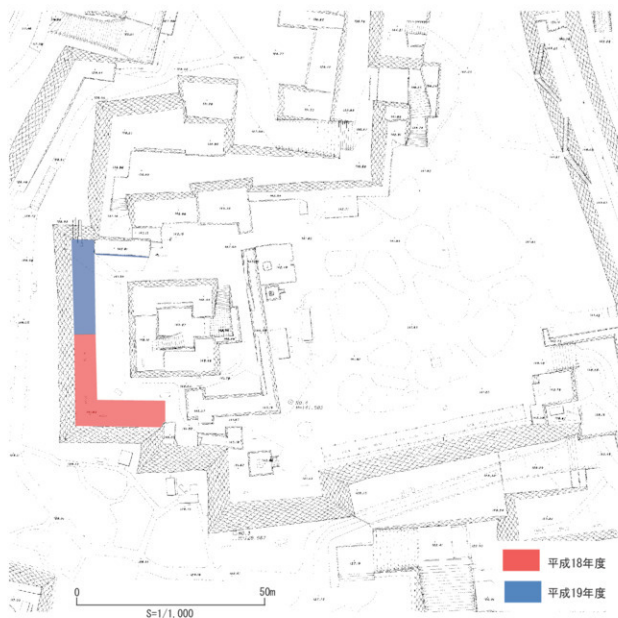
天守曲輪西半整備工事にかかる経過は下記のとおりである。

平成10年3月	『史跡津山城跡保存整備計画』策定
平成18年1月25日～平成18年3月15日	天守曲輪西半整備工事設計委託
平成18年11月10日～平成19年3月24日	天守曲輪西半整備工事監理業務委託
平成18年11月10日～平成19年3月19日	天守曲輪西半整備工事

(4) 事業費

事業に要した予算は下記のとおりである。(単位：円)

	実施設計	工事費	設計監理	年度別計
平成17年度	2,998,000			2,998,000
平成18年度		7,009,800	493,500	7,503,300
	2,998,000	7,009,800	493,500	10,501,300



第22図 整備工事範囲図 (S=1:1,000)

第2節 工事の概要

(1) 工事の種別・規模

自然石樹脂舗装

面積 210㎡

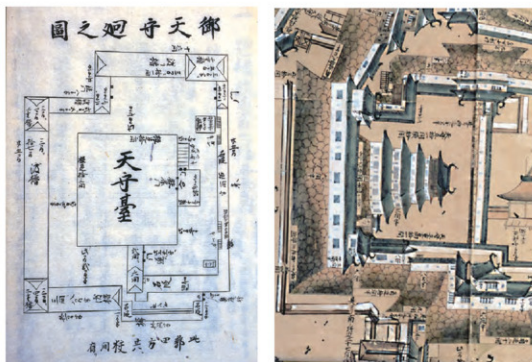
(2) 工事の過程

工事の施工は、平成18年11月10日より着手し、平成19年3月16日に竣工検査を完了した。実質工期は約4ヶ月であった。

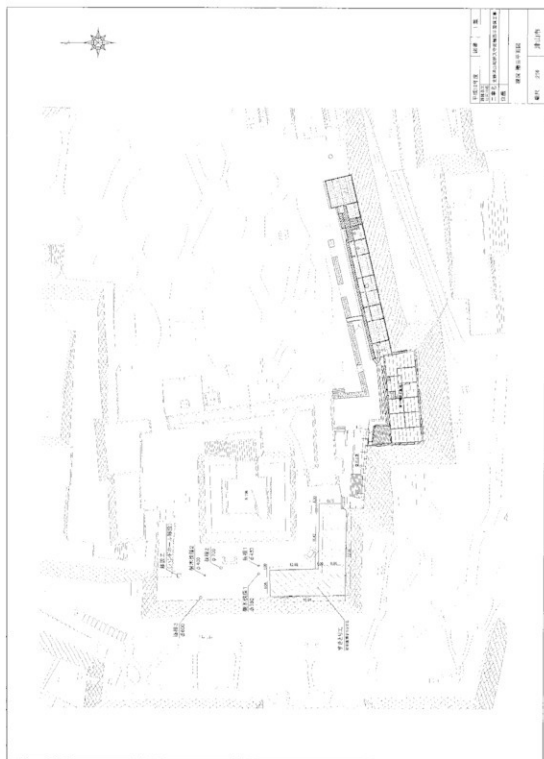
工事の統括は津山市教育委員会文化課、設計は(株)文化財保存計画協会、工事施工は(株)ウチダが行った。

(3) 工事の概要

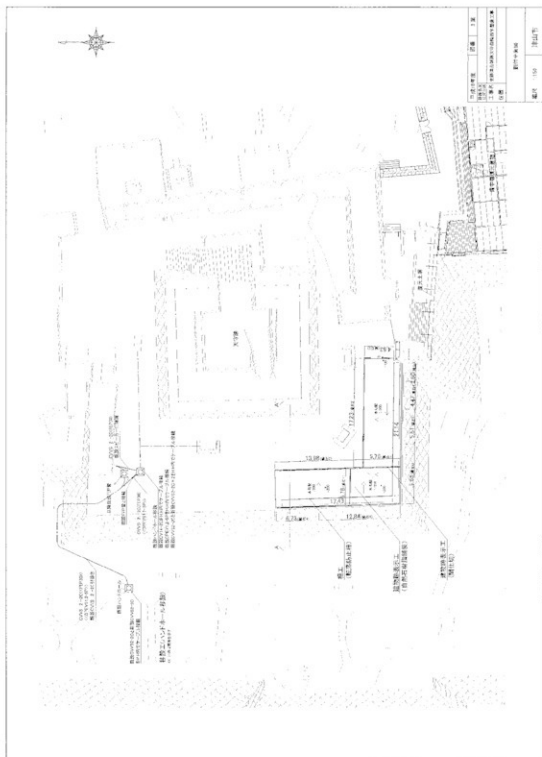
天守台の西側部分には、南北方向に細長い多門櫓が存在していた。「天守廻之図」からは、「天守臺(台)」と記された部分の南西・西・北西を囲むように「渡櫓」が存在していたことが分かる(第23図)。これはこの部分が「多門櫓」と呼ばれる櫓で、北西と南西の角部分が櫓になっていたことを示している。絵図には櫓の寸法が描かれており、これによると、



第23図 天守廻之図(左)と津山絵図(天守曲輪部分)(右)



第 24 図 平成 18 年度整備工事図面 1



第25図 平成18年度整備工事図面2

南面多門櫓：東西八間半 南北三間
北西及び南西角の二重櫓：東西三間 南北四間
西面多門櫓：東西三間 南北十七間
北面多門櫓：東西五間半南北二間

であることがわかる。第 23 図右の「津山絵図」に描かれた多門櫓からも、平屋建ての細長い櫓と、その両側に二階建ての櫓が建っていることが分かる。

今回の整備工事では、南面多門櫓と南西角の二重櫓、及び西面多門櫓の南半分の位置の平面表示を行うとともに、整備の上で影響が及ぶ樹木の伐採・伐根、ハンドホールの移設を行った。

まず表土のすき取りを行い、整備高にするための不陸補正を行った。平成 14 年度に実施した発掘調査からは、礎石など建物自体に関係する遺構は確認されていないが、櫓と平行して北側に長さ 1 m 分の豊島石製の雨落溝が確認されている。また、石垣から奥行き 6 m にわたってすべて栗石が充填されていることが判明しており（写真 5）、すき取りはこの栗石上面まで行った。その後砕石を充填して転圧し、ワイヤーメッシュを敷設、コンクリート基礎工を行った。仕上げとして自然石樹脂舗装を行い、建物内部の表示とした。なお、樹脂舗装は、南西角の二重櫓と平屋の櫓部分の区別をつけるために色調を変えて表現した。

建物の輪郭は御影石を設置して表現した。また、転落防止として、木製の柵を設置した。

(4) 工事関係者

1. 指導・助言

文化庁記念物課
岡山県教育庁文化財課
史跡津山城跡整備委員会

2. 工事発注者

事業主体：津山市
事務局：津山市教育委員会文化課

3. 設計・監理

株式会社 文化財保存計画協会
〒 101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2 丁目 5 番 5 号 岩波書店一ツ橋ビル
代表取締役 矢野和之

4. 工事施工

株式会社 ウチダ
〒 708-0836 岡山県津山市林田町 48 番地
代表取締役 内田信一



写真 5 第 6 次調査（平成 14 年度）で検出した埋没石垣と雨落溝（西から）



工事着手前（南から）



工事着手前（東から）



表土すき取り作業



表土すき取り状況



打合せ



表土すき取り後



樹木伐採前



樹木伐採作業

平成 18 年度整備工事 図版 2



ハンドホール移設作業



ハンドホール移設作業



舗装後（北から）



舗装後（北東から）



舗装後（東から）



舗装後（西から）



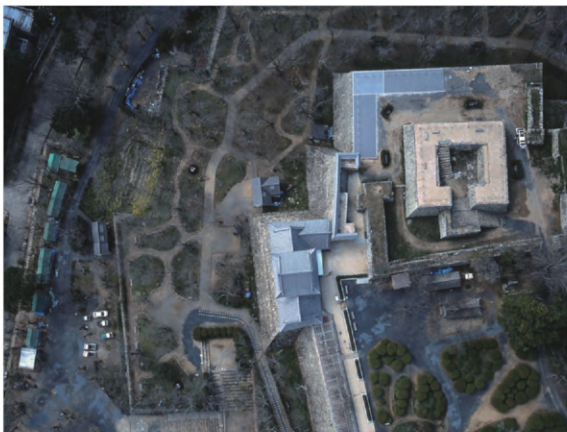
舗装後（南から）



舗装後（北から）



整備工事後航空写真（上が北）



整備工事後航空写真（右が北）

第2章 天守曲輪北面多門櫓腰石垣修復工事(平成19年度)

第1節 事業の概要

(1) 事業に至る経過

津山市は、平成18年度以降の史跡津山城跡保存整備事業として、「天守曲輪」部分の整備に着手した。

天守台の南西、西、北西を囲むように「渡櫓」が描かれている。この部分が「多門櫓」と呼ばれ、北西と南西の角が二重櫓で、その間に平屋の細長い櫓が存在したことが分かっている。平成18年度はその最初の整備として、南側の多門櫓、南西角の二重櫓、及び西側多門櫓の半分までの自然石樹脂による舗装を行い、多門櫓の平面表示とした。

この多門櫓の舗装工事が平成18年度は南半分だけで終了したため、今年度はその続きである西側多門櫓の北半分の平面表示を行った。

また、天守曲輪の北面には、もともと多門櫓が低い腰石垣の上に建っており、現況はその腰石垣のみが残っているが、客土や樹木により石垣が覆われた状態で、石垣の存在も不明瞭であった。この腰石垣の東にある七番門南の檜台石垣についても同様であり、一連のものとして整備を実施することとした。

整備に先立ち、この腰石垣と七番門南檜台石垣部分の発掘調査を実施し、石積みの状況や基底部の確認を行ったところ、木の根によって石が移動し、石垣天端は凹凸がみられ、石が抜け落ちている箇所がみられることが判明した。また、間詰石が欠落していることにより、石と石との間に隙間ができ、そこから内部に詰められている栗石が外に流出していた。

この調査結果を受け、整備工事では腰石垣の解体修理を行うこととした。

整備工事は平成19年度の単年で実施した。

工事は史跡津山城跡整備委員会、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の指導・助言のもと実施した。

(2) 事業体制

事業は津山市教育委員会が直営で実施した。

(3) 事業の経過

天守曲輪北面多門櫓腰石垣修復工事にかかる経過は下記のとおりである。

平成10年3月	『史跡津山城跡保存整備計画』策定
平成18年1月25日～平成18年3月15日	天守曲輪西半整備工事設計委託
平成19年9月3日～平成19年10月31日	津山城跡天守曲輪的多門櫓腰石垣修復設計業務委託
平成19年12月21日～平成20年3月21日	津山城跡天守曲輪北面多門櫓腰石垣修復工事監理業務委託
平成20年1月7日～平成20年3月19日	津山城跡天守曲輪北面多門櫓腰石垣修復工事

(4) 事業費

事業に要した予算は下記のとおりである。(単位：円)

	実施設計	工事費	設計監理	年度別計
平成17年度	2,998,000 (多門櫓平面表示)			2,998,000
平成19年度	1,228,500 (石垣修復)	9,088,800	493,500	10,810,800
合計	4,226,500	9,088,800	493,500	13,808,800

第2節 工事の概要

(1) 工事の種類・規模

石垣復旧
面積 23.8㎡
自然石樹脂舗装
面積 14.5㎡

(2) 工事の過程

工事の施工は、平成20年1月7日より着手し、平成20年3月25日に竣工検査を完了した。実質工期は約3ヶ月であった。

工事の統括は津山市教育委員会文化課、設計は(株)文化財保存計画協会、工事施工は(株)和田石材建設が行った。

(3) 工事の概要

天守曲輪西面多門櫓腰石垣修復工事について、工種ごとの施工概要を以下に記す。

(a) 仮設工事

工事関係車両の進入のため敷鉄板を石垣修復箇所に設置した。

(b) 石垣解体工事

工事着手前に石垣の現況写真撮影を行い、積石のすべてに番付を付し、テープで表示した。各石材は目視等により石材の破損状況を確認し、再使用の可否を判定した。新補石が必要な箇所については、取り外し前に型取りをした。石垣の解体はクレーンによって行い、各石の寸法、重量を記録しながら石材仮置場に小運搬し、並べた。仮置きした石は清掃し、番号が分かるように整理した。その後、裏栗を撤去し、土を除去しながら仮置場にストックした。

(c) 石垣復旧工事

新補石は兵庫県高砂産の凝灰岩（亀山石）を使用することとし、城内に既に仮置きされている石材から、使用可能なものについては転用材として使用した。石の製作は周囲との関係を確認しながら、加工整形と表面の仕上げを行った。石積みはクレーンで行い、撤去前の写真等を検討しながら行った。根石部分の裏込めには土と石灰を混ぜ合わせたものを入れ、裏込め部分の補強とした。また、栗石については、粒度と量を単位当たりで2箇所調べ、篩い分けた。

新補材については、旧材との識別ができるよう間詰石にはマーキングを行い、積石には鉛を注入して刻印を施した。

(d) 建物跡表示工事

現況石垣の天端を測量し、高さを確認の上、建物の輪郭表示となる緑石の高さを決めた。その後、遺構面に気を付けながら重機にてすき取りを行い、高さ調整を行った。同時に、転落防止用柵の基礎ブロックを埋め込んだ。上面に舗装のための砕石を入れて路盤をつくり、建物表示用の御影石をモルタルで設置した。その後、コンクリートにて舗装を行い、仕上げとして自然石の樹脂舗装を行った。樹脂舗装は、昨年度と同様、二重櫓部分と平屋部分との区別をつけるため、色調を若干変えたものとした。転落防止の柵は杉材を用い、間にロープを取り付けた。

(4) 工事関係者

1. 指導・助言

文化庁記念物課
岡山県教育庁文化財課
史跡津山城跡整備委員会

2. 工事発注者

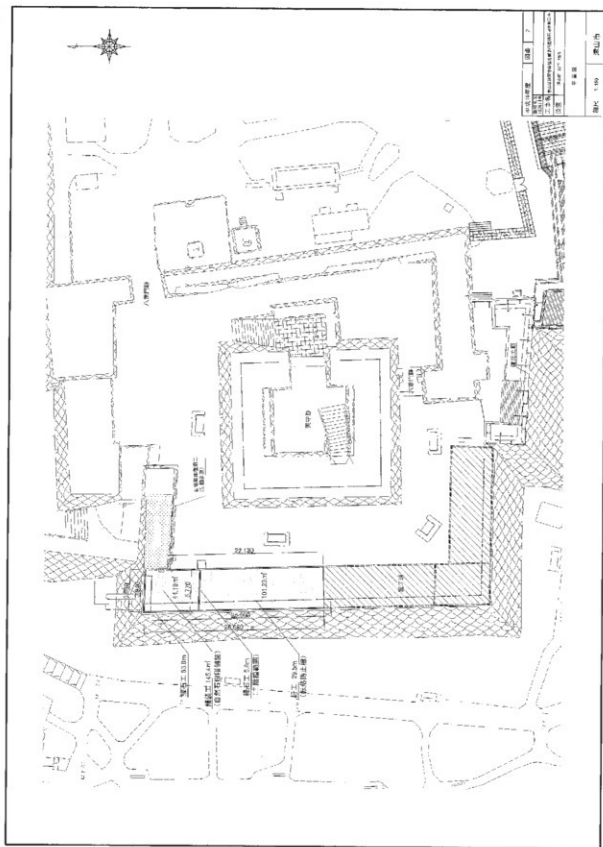
事業主体：津山市
事務局：津山市教育委員会文化課

3. 設計・監理

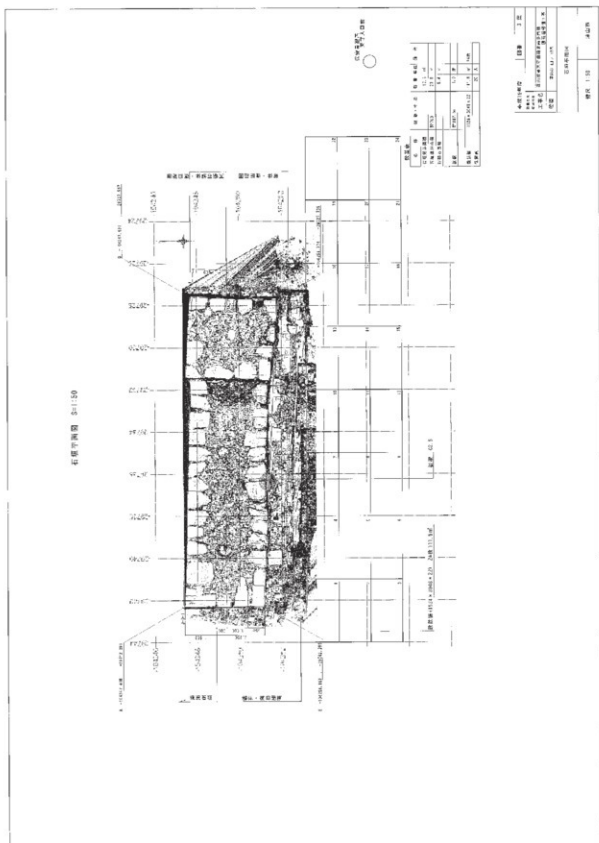
株式会社 文化財保存計画協会
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2丁目5番5号 岩波書店一ツ橋ビル
代表取締役 矢野和之

4. 工事施工

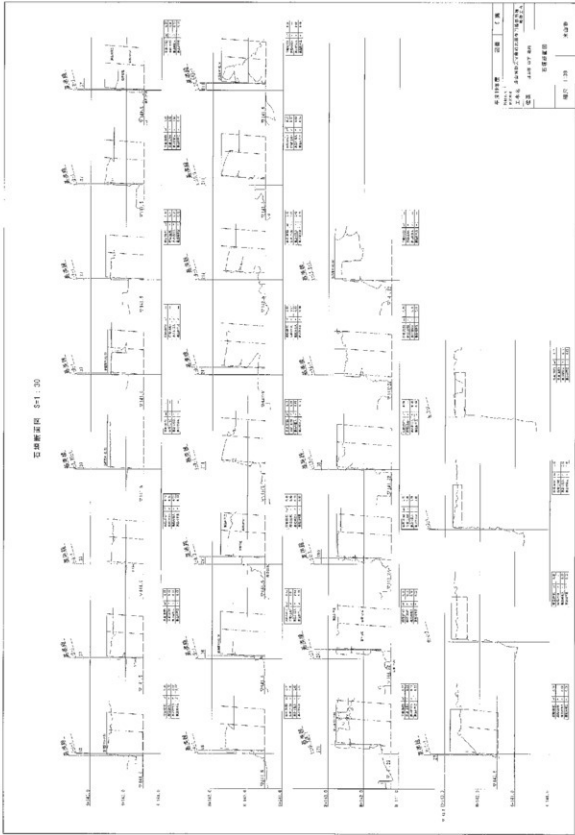
株式会社 和田石材建設
〒552-0012 大阪府大阪市港区市岡2-1-25
代表取締役 和田行雄
現場代理人 岡崎芳樹



第 27 図 平成 19 年度整備工事図面 1



第 28 図 平成 19 年度整備工事図面 2



第30図 平成19年度整備工事図面4

第3節 整備工事中に発見された埋没石垣について

多門櫓腰石垣の修復にあたり、積石を撤去したところ、内部に石垣が埋没していることが判明した。石垣は栗石の中に埋没していたため、すべてを調査することはできなかったが、上面から3石以上存在することが確認できた。

埋没石垣は、多門櫓腰石垣の南面部分の下に埋もれており、解体した多門櫓腰石垣が南面しているのに対し、面を北にもつ。また、石垣は腰石垣に対して平行ではなく、七番門櫓台石垣西面から鋭角的に入隅を形成するように斜め方向に約8m西へ延び、その後南方向へ鋭角的に折れて出隅を形成している。南方向へ延びた石垣は、南北方向の多門櫓の東側部分の地中にあり、第6次調査（平成14年度）、及び第3次調査（平成11年度）で既に確認されている埋没石垣につながっていくものと推測される（第32図赤色部分）。

津山城の本丸では、今回の整備工事で発見された多門櫓東側を通る埋没石垣の他に、本報告書第2部第1章第3節で報告した天守台北側の埋没石垣、及び第2次調査、第3次調査（平成10・11年度）で

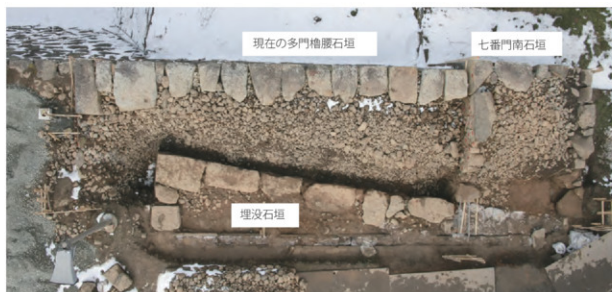


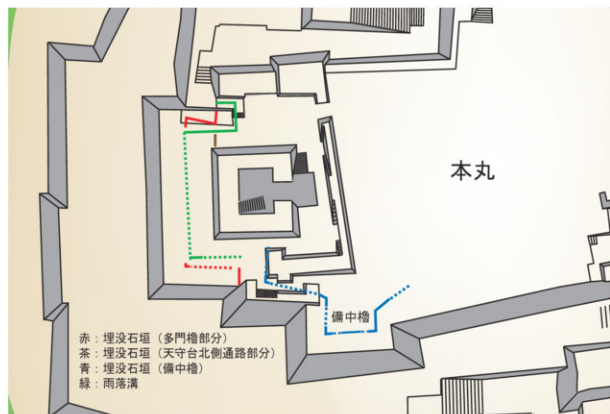
写真6 多門櫓腰石垣から検出された埋没石垣（上が北）



写真7 埋没石垣（北東から）



写真8 埋没石垣（西から）



第 32 図 埋没石垣と雨落溝の推定ライン

報告されている備中櫓石垣の内部に埋没していた石垣がある。埋没石垣が確認できた箇所をもとにした埋没石垣の想定ラインが第 32 図である。

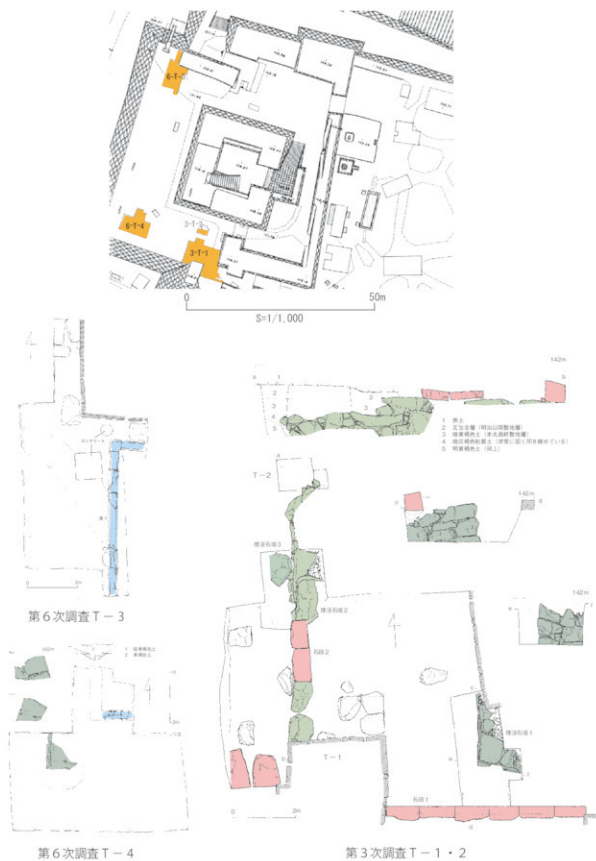
赤い部分が多門櫓周辺で埋没石垣が発見された地点で、現在の多門櫓西面石垣よりも一回り小さい規模であったことが分かる。この南北方向の石垣に平行あるいは一部で交差する形で豊島石製の雨落溝がこれまでの調査で検出されている（第 32 図の緑色部分）。この溝は南北方向の多門櫓の雨落溝と考えられ、北側は七番門の暗渠排水につながるものである。

青色の部分は、備中櫓の発掘調査により検出された石垣で、現在の備中櫓南面石垣から約 6m 内側に入ったところに位置する。石垣の東側は約 60 度の角度で北東方向へ延び、西側は約 70 度の角度で北西方向へ延びている。この石垣の西側は五番門南石垣の雁木最下段から約 1m 北側で検出された埋没石垣につながるものと推測される。

茶色の部分は今回報告の第 11 次調査で検出された西側に面をもつ南北方向の石垣である。この石垣は北は多門櫓腰石垣、南は天守台石垣によって破壊されていると推測される。

これらの埋没石垣が実際に表出していた時期があったのかは不明であるが、築城の最終段階である元和 2 年（1616）の時点では現在表出している石垣は完成していたと考えられるため、慶長 9 年（1604）の築城開始時から年月をかけて築城を行っている過程で設計変更が生じ、その度に石垣が埋められたものと思われる。

雨落溝は、現在表出している最終段階の石垣上に建てられた建物に対してつけられたものと考えられる。津山城では過去の調査においても雨落溝あるいは暗渠排水が良好な状態で遺存している箇所が多くみられるため、排水のあり方についても今後の調査により多くの知見が得られるものと思われる。



第33図 過去の調査で埋没石垣及び雨落溝が検出された調査区 (S=1:1,000) 及び調査区平面図 (S=1:150)



整備前 (南から)



整備前 (南東から)



整備前 (南から)



整備工事着手前 (南東から)



整備工事着手前 (南東から)



多門櫓腰石垣修理前 (南から)



七番門南石垣南面修理前 (南から)



石材番号付作業状況

平成 19 年度整備工事 図版 2



石材番号付



石材番号付



伐根作業



石垣解体作業



石垣解体作業



石垣計量



石垣解体



解体した石の仮置き



石の型取り



石積み作業



石積み直し (七番門南石垣西面)



新補石材刻印



新補石材刻印 (拡大)



石材補修



裏込補強状況



裏込補強作業

平成 19 年度整備工事 図版 4



栗石裏込作業



すき取り作業



路盤造成



路盤造成



緑石据え付け



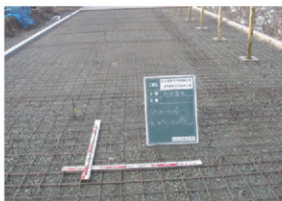
転落防止柵基礎ブロック掘削



転落防止柵基礎ブロック据え付け



転落防止柵据え付け



ワイヤーメッシュ設置



目地棒設置



自然石樹脂舗装



自然石樹脂舗装完了



整備工事完了 (東から)



整備工事完了 (南東から)



整備工事完了 (南から)



石垣解体修理完了 (全体)



石垣解体修理完了 (多門櫓腰石垣南面)



石垣解体修理完了 (七番門南石垣南面)



石垣解体修理完了 (多門櫓腰石垣西面)



石垣解体修理完了 (七番門南石垣東面)



解体中に発見された埋没石垣



埋没石垣 (北面)



埋没石垣 (北面と西面)



埋没石垣 (北面東側)



埋没石垣（北面中央）

埋没石垣（北面西側）



埋没石垣発見時航空写真（写真左が埋没石垣）



埋没石垣発見時航空写真 (写真右端)



埋没石垣全景 (上が北)

報告書抄録

ふりがな	しせきつやまじょうあと							
書名	史跡 津山城跡							
副書名	保存整備事業報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第86集							
編著者名	豊島雪絵・宮崎尚子							
編集機関	津山市教育委員会 津山弥生の里文化財センター							
所在地	〒708-0824 岡山県津山市沼600-1 電話0868-24-8413 FAX0868-24-8414							
発行年月日	2016年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード 市町村	道跡番号	北緯	東経	整備事業期間	面積	調査原因
史跡 津山城跡	岡山県津山市 山下83-3番地 ほか	33203	654	35° 3' 46"	134° 0' 20"	(H18) 2006. 4. 7～ 2007. 3. 31 (H19) 2007. 6. 1～ 2008. 3. 31	(H18) 発掘調査 248.7㎡ 整備工事 210㎡ (H19) 発掘調査 172.5㎡ 整備工事 168.8㎡	遺構確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
津山城跡	城	近世		建物跡・溝		瓦・陶磁器		
要約	<p>津山城跡は、慶長9年（1604）、津山藩主森忠政によって、吉井川と宮川の合流点を望む小高い山を利用して築かれた。山頂を削って本丸とし、本丸を囲むように二の丸、三の丸が配置されており、このほぼ全域が国の史跡指定を受けている。</p> <p>平成18年度の確認調査では、表鉄門跡、及び本丸御殿玄関部分の調査を実施し、表鉄門の礎石の抜き取り痕と推測される土壌や、本丸御殿玄関の石敷などを確認した。整備工事では、多門櫓南半部の平面表示を行った。</p> <p>平成19年度は、天守曲輪内の多門櫓腰石垣及び七番門石垣、及び通路部分の確認調査を実施し、建物の基礎と考えられる石列、多門櫓の雨落溝、埋没石垣などが検出された。整備工事では、多門櫓北半部の平面表示、及び腰石垣南面の解体修理を行った。</p>							

史跡津山城跡

保存整備事業報告書Ⅱ

2016年3月31日 発行

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第86集

発行 津山市教育委員会生涯学習部文化課
津山弥生の里文化財センター

〒708-0824

岡山県津山市沼600-1番地

T E L 0868-24-8413

F A X 0868-24-8414

印刷 (株)津山朝日新聞社
